國學院大學学術情報リポジトリ

新聞家庭面の女性学：性別面建ての歴史とその改廃をめぐって

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2023-02-06
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 田中, 和子, 女性と新聞メディア研究会
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001076

新聞家庭面の女性学

――性別面建ての歴史とその改廃をめぐって――

田中和子
女性と新聞メディア研究会

はじめに

新聞の面建て（ページ構成）は、その日のトップ記事を扱った一面の「総合面」や多様な内容の「社会面」を除いて、「政治面」、「経済面」、「スポーツ面」、「テレビ面」、「文化面」など報道内容の分野ごとにまとめられており、社会の中の無秩序な情報に整理を与えて読みやすくする編集がなされている。本稿の考察対象である「家庭面」は、家庭生活や日々のくらしにかかわるトピックから成り立っているが、他面と比較すると、その内容および想定されている読者層の双方において、ジェンダーによる区分けがなされている点で、他の紙面とは性格を異にしている。

もともと人びとの新聞閲読行動は、テレビと同様にライフスタイルに密接に関連しており、接触態度や接触時間には読者のライフスタイルの違いや年代差のみならず、性の違いが大きく反映している。新聞の情報に対しても、対象読者層を絞った雑誌ほどではないにしろ、男女で異なる〝読み分け〟がなされている。雑誌の場合は、〝女性雑誌〟〝男性雑誌〟という通称に象徴されているように、刊行される時から既に読者の性が前提されているものが多い。それに対し新聞やテレビでは、その情報内容は一応、万人に開かれており、情報内容のジェンダーによる偏りは、一見

しただけでは見えにくい。しかし、接触行為の結果からみると、女性がよく読む（見る）情報内容、男性がよく読む（見る）情報内容、というものが存在する。

たとえば表1に示した一九八三年の日本新聞協会研究所による「全国新聞信頼度総合調査」によると、「社会面」「ラジオ・テレビ欄」「地域版」「連載記事・キャンペーン」への接触率は男女ともに近似した値を示しているものの、これらを除く他の各面では男女の接触率に差がある。「いつも読む」記事の回答値だけを拾ってみると、女性では「ラジオ・テレビ欄」（七八％）に続いて、「地域版」（六〇％）、「社会面」（五八％）、「家庭・婦人欄」（五三％）、「文化・学芸欄」（三六％）、「投書」（三一％）といった順位で読まれている。ところが男性の場合は、第一位は「ラジオ・テレビ欄」（七三％）、第二位は「社会面」（七〇％）、それ以降は「スポーツ面」（六九％）、「地域版」（六〇％）、「政治記事」（五三％）、「経済・商況記事」（三八％）の順でよく読まれており、女性とは第二位以下の構成が大きく異なっている。特に男女差の大きいものを挙げてみると、「家庭・婦人欄」（女性五三％＞男性一二％）を筆頭に、「スポーツ面」（女性二八％＜男性六九％）、「政治記事」（女性二〇％＜男性五三％）でその差が目立っている。「いつも読む」比率で男女差が最も大きい「家庭・婦人欄」は、男性が「読まない」比率が最も高い紙面でもあり、四四％と半数近い男性は「家庭面」に目を通していない。この調査にあらわれた〝家のことは女性〟、〝スポーツ（戦い）と政治は男性〟という新聞読者の情報摂取パターンにおける男女差には、社会の伝統的な性別役割意識がそのまま反映されているようにみえる。

一九七九年一二月、第三四回国連総会で採択された女性差別撤廃条約の前文に、「社会及び家庭における男子の伝統的役割及び婦人の役割の変更が、男女間の完全な平等の達成に必要である」と述べられているように、「男は仕事、女は家庭」という性別役割分業観の変革は、いまや世界的な趨勢となっている。それにもかかわらず、家庭面の読者に女性が多く、スポーツ・政治面の読者に男性が多いという実態の背後には、情報を送り出す新聞の側にも、「女性

表1　よく読まれている記事，読まれない記事（1983年調査）　単位：%

記事	政治記事		経済商況記事		外電国際記事		スポーツ面		社会面	
性別	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性
いつも読む	20.0	53.0	10.3	37.5	10.3	28.4	27.7	69.3	58.4	69.5
時々読む	57.2	39.3	38.6	41.4	42.3	47.9	38.4	21.6	30.9	24.7
読まない	17.5	5.5	42.7	15.8	38.0	16.8	27.7	6.4	6.4	3.2

記事	地域版		ラジオテレビ欄		文化学芸欄		家庭婦人欄		芸能欄	
性別	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性
いつも読む	60.3	59.5	77.7	72.5	35.8	19.9	53.4	11.6	31.1	15.7
時々読む	28.5	30.4	15.1	20.3	40.6	51.7	33.7	35.9	45.8	48.3
読まない	6.3	5.9	4.0	4.1	16.9	22.0	8.1	43.9	16.3	28.3

記事	解説欄		社説		コラム		連載記事キャンペーン		投書	
性別	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性
いつも読む	14.5	23.6	14.3	26.1	18.3	20.4	15.9	13.4	31.4	18.5
時々読む	41.4	48.7	39.5	46.4	33.4	43.6	33.8	40.5	41.7	47.3
読まない	34.7	21.0	37.9	21.4	33.9	24.3	39.6	36.4	19.1	26.2

日本新聞協会研究所『現代の新聞読者とマスコミ接触の実態』日本新聞協会，1984年より作成

読者向け」「男性読者向け」をあらかじめ想定して、記事を出稿しているという実情があるのではないだろうか。たとえば、多くの新聞では、家庭面の投書欄は投稿者が女性に限定されている。また女性の読者向けと思われる、女性の社会運動グループやネットワーキングを紹介した記事やその他の女性関連記事が、総合面や政治面、国際面や社会面で取り上げられずに、家庭面に掲載されている実態は、紙面に目をとおせば誰にもすぐに指摘できることである。さらに、毎日新聞では、「女のしんぶん」として、女性向け

の紙面を提供するようになって久しい。あるいは、日本経済新聞の「婦人　家庭」面や、沖縄タイムズ「女性・くらし」のような、家庭やくらしと女性とが同列に扱われた呼称をもつ紙面もいまもって存在している。このように送り手側は、家庭面の編集にあたって、明らかに女性読者を想定した紙面づくりを行っているように思われる。

本稿では、はじめに家庭面の成立過程を概観することで家庭面が発生史的に〝女性向け〟として拘束されていた事実を明らかにしたのち、一九八五年と一九八六年の家庭面記事の内容分析を行って、未だに女性向けの記事が多い点や「婦人欄」的性格が残存している点、家庭＝女性という発想から抜けきれていない点などを実証的に考察し、その状況をどのようにすれば変革できるかを具体的に考察してみたい。

Ⅰ　家庭面の成立

1　「婦人向け」紙面誕生の歴史的背景

今日の家庭面の前身は、一八九八年（明治三一年）三月六日より始まった、大阪毎日新聞の「家庭の栞」である。当時の大阪毎日新聞は八ページ建て、各ページ六段組であったが、その第六面の一段と三分の一ほどのスペースを「家庭の栞」にさいた。これは社長として迎えられた原敬のアイデアのひとつといわれており、一回目は〝料理の達人〟茨城宗右衛門翁の談話の連載ものであった。(1) その目的は当時の社告によれば、「衛生、育児、家政、料理法等総て家庭に関する問題」についての「平易」で「実用を主」とした情報を提供し、この欄が「平民的家庭の伴侶たるを期する」ことにあった。(2) 社告には「婦人」や「女性」向けとは表立ってうたっていないが、社告のあとに、「小児を持てる母へ」という母親向け育児記事があることや、当時、家事・育児役割の大半が女性に担われていたことを考え合わ

せれば、「家庭」とは名乗っていても、女性を対象としたコーナーであったことは明らかであろう。折しも、「良妻賢母主義」の教育が強力におしすすめられている時期でもあった。大阪毎日はは、一九〇〇年春には大阪で初の女性の記者太田馨、岸本りう子を入社させ、同年七月九日からは「家庭の栞」を「家庭」欄と改称、スペース、内容ともに拡充を行った。一方、東京の日刊紙として「家庭」にかかわる紙面が登場したのは、読売新聞一九〇四年一二月九日の「家庭小話」欄が最初である。(3)

新聞に初めて「婦人」と銘うった紙面、すなわち「婦人面」ができたのは一九一四年（大正三年）四月三日のことで、東京の読売新聞で「よみうり婦人附録」が始められたのを嚆矢とする。これは、日露戦争後の新聞社間の販売競争に遅れをとっていた読売が、遅れを取り戻すべく企画したもので、フランスの『フィガロ』紙の婦人欄を参考にしたといわれており、ほぼ一ページが使われた。その紙面構成は、論説にあたる「婦人と時勢」、著名女性らの動向を探る「婦人の消息」、「新婚の人」、「女学校消息」、子どものための「こどもしんぶん」「世界童話」、日常的な家事に役立つ「毎日の惣菜」「市中の物価」「家庭園芸案内」などからなっており、ほぼ現在の家庭面の源流がうかがえる。読売は、「婦人附録」の創設を機に、これまでの六ページ建ての新聞を八ページに増やし、「婦人附録」には羽仁もと子（『婦人之友』創刊者）の夫である羽仁吉一を編集顧問に迎え、与謝野晶子や田村優子も入社して編集を援護した。(4) この「よみうり婦人附録」は、一九一九年九月一一日から「よみうり婦人」と改称した。

こうした「家庭欄」や「婦人面」の登場には、一九〇〇年前後の女性雑誌の創刊ブームが関係していよう。たとえば、現存している『婦人画報』が一九〇五年、『婦人之友』が一九〇八年、『婦人公論』が一九一六年、『主婦之友（現、主婦の友）』は一九一七年に創刊されているが、この時期は日本社会の近代化・都市化・産業化が進み、雇用人口が増加することによって専業主婦が増加し、「婦人」とか「主婦」という言葉が、洗練された新鮮な響きをもってたちあ

らわれてきた時期と重なっている。「よみうり婦人附録」が企画された背景には、このような女性雑誌の隆盛、そして〝婦人と主婦の発見〟および、新聞やモノを購買する力をもった〝消費者としての女性の発見〟があったと考えられる。

一方、この時期は、政界事情や論壇について多くの紙面をさいていた政論新聞である大新聞が、民権運動の衰退とともに没落し、かわりに大阪朝日、東京朝日、大阪毎日、東京日日、読売を始めとする小新聞、すなわち大衆紙が台頭してくる時期でもある。現在の新聞の前身であるこれらの大衆紙は、三面記事的な内容や娯楽記事を中心とした平易な文章で、商人、職人や女性たちに支持され、隆盛を誇った。大衆社会化が一部エリート層でない普通の人びとの情報摂取活動を活発化させ、マスメディアを発展させたわけだが、この新聞の大衆化には、女性も重要な位置を占めていたのである。

もちろん、近代の大衆社会が完成するには、「教育」が重要である。女性が新聞読者としてたちあらわれてくるためには、それだけのリテラシーすなわち教育的基盤ができあがっていなければならなかった。当時、女性には公民権がなく、結婚すれば法律的にも無能力者であったから、政治や社会の動きを伝える新聞は、基本的には男性の読み物であったと考えてよいだろう。たとえば、明治時代、山川菊栄が教師に「新聞を読んでいる」というと、教師は渋い顔をしたというエピソードは、その一端を示している。「（当時の）娘には新聞も小説も読ませないというのが、そのころまじめな家庭の誇りだったのですから」[5]と山川は述べている。しかし、義務教育や女子教育が発展するにつれて、当然のことながら女性のあいだにも活字への欲求が高まってくる。しかも、良妻賢母たることへの要求が強いにもかかわらず、核家族化によって母や姑からの知恵の伝達がかなわない。故郷を離れて都市に移り住んだ比較的高学歴層の女性たちが、生活のアドバイスを当時のマスメディアである本や新聞、雑誌から得ようとしても不思議ではなかろ

う。そこで前述のような内容をもつ女性向きの欄が登場し、広く受け入れられていったのである。さらにまた、明治から大正に移ろうとする時代は、女性の労働や、教育における女性の地位向上が論壇的テーマとなる時期でもあり、各紙誌が〝婦人問題〟を多く取り上げるようになっていたことも、「よみうり婦人附録」の創設に大きくあずかっている。「婦人附録」ができる前の一九一三年の読売は、「婦人界消息」として青鞜社の動きを伝えたり、「男女共学問題」や「教育上の性的差別見」を論説で掲げるなどしており、〝婦人問題〟が争点であった時代背景をうかがわせる。

新聞が大衆化し、女性にも読まれるようになったことはまた、読売をはじめとする大衆紙の投書欄の充実からもいえる。創刊時から「大衆とともに」の姿勢をとってきた同新聞は、一九一四年四月三日の「よみうり婦人附録」の創設時に、早くも「婦人の声」欄を出現させている。「婦人の声」の冒頭には、「この欄には婦人、家庭に係ったどんな小さな感じでも語り合って見たいと思ひます。婦人方はもとより男子の方からも投稿を歓迎致します」と書かれていた。[6] また、「身上相談」といえば即、読売新聞が思い起こされる「身上相談」欄（現在の「人生案内」）は、同年五月二日から「婦人附録」で始まっており、読者からの便りを載せている。

2　戦中・戦後の「家庭面」

このような「家庭欄」や「婦人面」は、昭和に入ると、家庭維持のための実用記事を主とするコーナーの性格を強めていく。その大きな原因としては戦争の時代になり、生活が変化しはじめたことがあげられる。料理記事ひとつとっても、大正時代には〝お袋の味〟ではない、ちょっと目先の変わった料理を扱った記事が人気を呼んだのに対し、生活が切り詰められるようになると、たとえば「食用になる野草」のような記事が喜ばれたという。衣服や住居に関

することも同様で、女性が「銃後」を守るため、戦時色の濃い、より実用に徹した記事が掲載されるようになったのである。

やがて戦争も末期になると、資源不足から新聞そのものが縮小・減ページになる。戦後家庭欄が再びあらわれたのは、まず読売新聞においてで、記録[7]によると、一九五一年（昭和二六年）九月一日からの「婦人」欄であるという。次いで縮刷版により調査したところ、同年九月一七日、毎日新聞の朝刊が、「家庭」欄を復活する。この時の「家庭」欄は四ページ建て朝刊の四ページ目、左半分七段ほどで、復活第一回目の九月一七日の同欄の記事内容は、「初秋の生花」「母たちの視野　丸岡秀子（エッセイ）」「パリ・モード　レースの流行」「直射は避けよう　上手な電燈の使い方」「家庭つくろい帖　レコードのそり直し」であった。

戦後の新聞は、用紙統制のため一九五一年の夏ごろまでは朝刊のみ、しかも多くが表裏一枚の二ページ建てというものであったが、九月ごろからは四ページ建て紙面が復活し、さらに用紙統制が撤廃されたことにより、朝、毎、読全国紙三紙とも同年一〇月一日から夕刊が二ページ建てで再開された。朝日では、この一〇月一日夕刊から「家庭」欄が登場、二ページ建て紙面の二ページ目、社会面の下三段ほどのスペースに、パリ・モードのスーツについての「白と黒の階調」、「伸びのびと子の育つ秋」「好きな日本料理　外国婦人に聞く」といった記事が掲載された。「家庭欄」は、敗戦後六年を経て、ようやく言論活動の自由が実質的に保障されるための媒体である〝紙〟の供給の再開とともに復活したのである。

その後、毎日では、朝刊「家庭」欄が一九五二年七月から夕刊にも載るようになったり、その夕刊の欄が「婦人」と名うたれていたり、あるいはまた、朝刊、夕刊どちらでも「家庭・婦人」と記してあったりと一貫しない名称の時期が続くが、一九五二年一〇月二五日の朝刊には、「家庭〝面〟」といえるような、下段は広告だけの一ページをまる

まる使った面建てとなった。一九五三年前後からは、朝刊での「家庭・婦人」面がほぼレギュラーとなったようだが、民放ラジオが始まったため、一九五三年七月一八日からは、ラジオ欄とスペースを分け合うようになり、再び〝面〟から〝欄〟に格下げとなった。これが〝欄〟から〝面〟に戻るのは、毎日の場合一九五七年一月四日からである。この時の名称は「家庭」で、「連動ナベの生活」「女の気持　おめでたい一家だんらん」「クッ　今年の流行」「ホームドクター　骨折と脱臼、捻挫」「年始に（詩）」「私は強く生きぬきます――『女の気持』で立ち直った本田さん」などの記事が八段にわたって掲載され、下段には小説が載っているといったように、内容的にもほぼ現在の家庭面と同様の構成となっている。朝日の場合は、夕刊での掲載がずっと続き、一九五三年一月には〝欄〟から〝面〟への体裁となった。しかし、朝日の家庭面は一九六二年一〇月三〇日まで夕刊にあり、他紙とは一線を画していた。

ところで、戦後の「家庭面」の歴史で特筆されるべきできごとのひとつは投書の活発化であろう。

朝日新聞の「ひととき」が初めて掲載されたのは、一九五一年一〇月二日夕刊の東京本社版からで、「家庭」欄復活の翌日のことであった。最初は著名女性のエッセイを掲載する欄として出発し、第一回のこのときの筆者は作家の平林たい子、その題名は「台所」というものであった。一般の女性の文章が初めて掲載されたのは翌一九五二年一月七日のことで、市川市の主婦による「〝しつけ〟ばやり」という投書であった。それ以降、「ひととき」は、「家庭」面における無名の女性の投稿欄として今に続いている。当初は「ただの女性に貴重な紙面を提供するのはいかがなものか」という意見もあったといわれているが、この欄は女性の圧倒的な支持を受けたのである。

実際、「ひととき」が一般の女性に開放されたことに対する一九五二年に寄せられた反応には、次のようなものが多かった。「私たち今までの女性は、世の中から離れて、うちの中にばかりくすぶっていました。そして、新聞は、偉いかたのお書きになるもの、……と思っていました。……それなのに近ごろは、かくれていた女のひとたちの声をの

せたり、多くの庶民の中から、女の考えを聞いて下さったり、……急に自分たちの足もとが照らしだされた感じです」「自分もひとつ、自分の周囲の出来事を文章にまとめてみようか、と大それた冒険となってあらわれました」(8)（……は引用者による省略、以下同様）。無名の女性が、しかも大勢、自分の思いを文章に綴り、それを世間に公表するようになったということは、女性の歴史の中でも大きな意味を持つできごとであった。そして、ビキニの水爆実験で犠牲となった第五福竜丸についての投書、「久保山さんの死を想う」（一九五四年九月二六日）をきっかけに、一九五五年六月には、「ひととき」に登場した女性たちの呼びかけによって「ひととき」読者の女性グループ「草の実会」が創設され、原水爆に反対する市民ネットワーキングにも影響を与えていく。

一九五一年にできた「ひととき」にならって、毎日新聞夕刊の「家庭」面（ないし「婦人」欄の時もあった）は一九五二年一〇月二七日から一般女性の投稿からなる「女性の広場」（一九五四年から「女の気持ち」）を、読売新聞も同年から「女性のこえ」（のちの「赤でんわ」）を創設する。「赤でんわ」は今では性別を問わないが、「ひととき」・「女の気持ち」は現在も、投稿者を女性に限定し、女性の思いを綴る欄として存続している。

3　家庭・家族の変動にともなう家庭面の変化

日本社会が戦後の混乱期を脱して、経済が急成長をとげた「高度経済成長期」には、電気洗濯機、電気冷蔵庫、電気掃除機の「三種の神器」の普及をはじめとして、家事労働の省力化と消費社会化が急速に進んだ。この時期は、外（会社）へ出て生産労働に従事する男のあり方と、家事と消費と子どもとの密着生活に追われる女のあり方が固定化される時期でもあった。のちに表面化する家族関係や社会における病理が醸成されていったのもこの時期である。

ちなみに、一貫して夕刊にあった朝日の「家庭」面は、一九六二年一一月一日、朝刊に移った。

しかし、女性の就業率が増し、産業構造の変化が進行するなかで女性の権利意識が強まり、一九七〇年前後から男女平等の機運が高まると、女性読者を想定した女性向けの面という性格の強かった従来の「家庭面」のあり方に、わずかながらも変化があらわれるようになる。アメリカの女性解放運動の動向や日本の運動が紹介されるようになり、女性差別にふれ、男女平等を説く記事が多くなった。高度経済成長に翳りがさすとともに、さらに一九七五年の国際婦人年、それに続く国連婦人の一〇年が始まることで、「家庭面」はひとつの転機を迎えたといってよいだろう。

「はじめに」のところで触れた女性差別撤廃条約はこの国際婦人年、国連婦人の一〇年の成果であるが、そこで伝統的な性別役割分業が否定されたことは大きな意味をもっている。また、性別役割分業の変革は、女性の社会進出を促進するものであるとともに、男性の家庭への参加を求めるものでもあった点にも注目しておく必要があろう。一九七五年一月三日から朝日新聞は「男女平等・考」を四回にわたり企画し、また一九七六年三月からは「戦後っ子夫婦」を連載して新しいカップルやファミリーの実態を描いて話題となった。

さらに、一九八〇年代に入ると、こうした流れを受けて社会の側も、両性の関係を含めて実際に変わり始める。特に顕著になったのは、親子・夫婦など家族をめぐる人間関係の変化で、登校拒否、いじめ、家庭内暴力、家庭内離婚等、それまで隠されていた問題が一挙に吹き出したかのようであった。朝日では一九七九年八月から七回、「密室の母子」と題して受験競争のあおりを受けて家庭内暴力等で揺れる親子の関係をルポしたほか、本多勝一『子供たちの復讐』（一九八〇）、斎藤茂男『妻たちの思秋期』（一九八二）、林郁『家庭内離婚』（一九八五）など八〇年代に入ってから子ども、妻、家族の変化・病理現象に関するルポルタージュが相次いで出版され、これらの問題が性別役割分業と深くかかわっていることが指摘されるようになった。朝日では、一九八二年の元旦の家庭面で「男の自立」に関する座

談会が組まれ、また一月四日からは「迫られる男の自立」が連載されはじめた。一方で、これらの現象を女性の社会進出と結び付け、母親のスキンシップや「母性愛」の欠如、「父権」の欠如の問題として論じ、子どもや夫を「錦のみ旗」として〝女性は家庭に帰れ〟と主張する人や論調もあった。

また、この頃から、それまで一ページだった全国紙の「家庭面」の二ページ、ワイド化が相次ぐ。先鞭をつけたのが毎日新聞で、一九八二年一二月に、それまでの「家庭」面の担当セクションであった学芸部の家庭班を、生活家庭部として独立させ、翌八三年一月から（広告面の都合で見開きではないものの）二ページ体制となった。続いて読売が「婦人とくらし」面を四月に両面化し、朝日はその一年後、八四年四月から見開きとなった。

だが本格的に「男性のあり方にこそ問題がある」と論じられるようになったのは、一九八五年、国連婦人の一〇年最終年前後からのことであろう。この変化は、「家庭面」のみならず、新聞全体に反映されている。まず八五年の新年から、いくつかの新聞が「家族」をテーマにした連載記事を掲げたことが興味深い。一月一日から毎日新聞が朝刊社会面で「夫たちの場所―家族新時代」という連載を開始したほか、朝日新聞も一月四日から「'85男たちの点滅」（大阪本社版夕刊）を始めた。ここでのテーマはいずれも家族・家庭であった。本論では分析に取り上げなかった日本経済新聞も、前年一一月二八日から社会面での毎週の連載コラム「サラリーマン」で、「家族の絆」シリーズを開始し、一九八五年の新年も引き続き連載を行っていた。また、一月一日の別刷りでは、「おやじ頑張れ」という特集（2ページ見開き）も組まれた。それまでは家族や家庭を論ずるのは「家庭面」の役割であり、その主人公は女性や子どもだった。それが社会面などの他面へ〝進出〟し、しかも男性と家族・家庭をテーマに据えたのだから、画期的であった。

一方で、「家庭面」の中に男性を引き込む試みも始まる。たとえば朝日が、一九八四年の三月二三日、それまで一ページであった「家庭」面を見開き二ページにすることを社告し、前述のように四月から実施、「ワーキング・ウーマ

ン」などの働く女性の実態をエッセイにしたシリーズをスタートさせた。そして同時期にはじまった「男の腕まくり」シリーズでは、男性に対し、〝家庭での仕事〟に目を開かせる試みを開始した。一方、サンケイ新聞（当時）は、一九八四年五月から「生活」面で「男の本音」を連日（月～金曜）連載するようになる。また、後にも言及するように、長い間「婦人」といいならわしてきた読売の「婦人とくらし」面が、八六年五月から「家庭とくらし」面へと名称を変更した。さらに、八八年五月には産経新聞が題字とともに全紙面を刷新し、家庭面をカラー見開きページにして料理カード形式の斬新な紙面構成を導入する一方、若い夫婦をターゲットに「赤ちゃん！パパだよ――記者の育児ノート――」を毎週掲載するようになる（八九年）など、各紙での新しい家庭面づくりの試みは続いている。これらの傾向は、いずれも男女の性役割が流動化しつつある状況に見合った動きといえよう。

以上で概観したように、当初女性のための特別ページとして始まった家庭面は、実用面を経て、現在では男性も含めて生活のあり方を探る面へと、その性格を変えつつあるといえるだろう。だが、こうした大きな流れにもかかわらず、現在の家庭面では、はたして男性もかかわり、読める、両性のための紙面づくりが十分なされているだろうか。「女性と新聞メディア研究会」が、男女雇用機会均等法施行をはさんだ一九八五年および一九八六年一〇月の朝日、毎日、読売の三大全国紙の家庭面を調査した限りでは、必ずしもそうではないという印象をぬぐえない。次節以降では、男女双方に等しく開かれるという家庭面の趨勢が、どの程度まで進展しているのか、量的分析をまじえつつ、実証的にみていくことにしよう。

表2　家庭面記事の分類項目と分類基準

分類項目	分類基準
社会	政治，経済，法律，女性運動以外の社会運動，労働など
自然・環境	自然，環境，園芸など
医療・科学	医療・健康（相談），生命科学，機械，コンピュータ技術など
生活	衣食住，マナー(冠婚葬祭など)，商品テスト，生活に関する調査など
教育・育児	家庭教育，学校教育，学校事情，育児のアドバイスなど
社会福祉	障害者，高齢者，福祉施設など
人生	生き方，宗教など
文化	文化，学芸，イベント案内，書評，音楽，映画など
女性学・運動	女性問題をテーマとする動き，運動，研究，報告など
投稿	ひととき（朝日），女の気持ち（毎日），赤でんわ（読売），人生相談など
その他	連載小説，その他上記以外のもの

II　家庭面情報の現在

1　一九八五年の家庭面の構成

まずはじめに、家庭面に記載されている記事内容を量的に把握するため、各紙の家庭面がどのような分野にどの程度言及しているか、その頻度・割合をみてみよう。分析の対象とした紙面は、一九八五年一〇月一日から三一日までの朝日、毎日、読売三紙の東京・最終版朝刊家庭面（朝日「家庭」、毎日「家庭」、読売「婦人とくらし」）、および翌一九八六年一〇月の同三紙朝刊の家庭面（読売のみ「家庭とくらし」に名称変更）である。家庭面の記事分野の分類項目は、「社会」「自然・環境」「医療・科学」「生活」「教育・育児」「社会福祉」「人生」「文化」「女性学・女性運動」「投稿」「その他」からなる一一項目で、その分類基準は、表2に示した。各記事は扱いの大小にかかわらず、一記事一件としてカウントした。ただし、

イベント案内、書評などが、同一コラムに複数掲載されている場合や投書の特集は、まとめて一件と数えた。

この分野分類に基づき、記事件数をカウントした結果が、一九八五年の表3と一九八六年の表4である。なお、家庭面は各紙とも通常二ページ分で、朝日は月曜日のみが一ページ、読売は八五年は月曜日のみ一ページで八六年は木曜日のみが一ページである。月曜日を除く朝日、読売両紙の八五年の家庭面は二ページ見開きとなっているが、毎日の場合は見開きではなく、一ページおきに左面に、読売の八六年も曜日によっては同様のスタイルで掲載されている。

まず、表3で一九八五年の家庭面をみると、三紙とも期間中の総記事数は三一〇～三四〇件ほどで、量的に大きなへだたりはみられない。一日に一〇件強の記事が家庭面の二ページに掲載されていることになる。

次に、各紙別にみていくと、朝日では、二段ほどの小さな扱いではあるが「おそうざいのヒント」（連日）や「秋はやはりサンマ　料理に一工夫で『ごちそう』に」（一〇月二日）、「エプロンをつくりませんか」（一〇月一六日）、「綿コートで暖かく優美に」（一〇月二八日）などの料理、裁縫、ファッション関連の実用記事に代表される「生活」が、二一％で筆頭にくる。現在ではなくなってしまったが、一九八四年から始まった、男性向けに料理や日曜大工のやり方を〝指南〟する「男の腕まくり」（毎木曜日）も、ここにカウントされている。次に、女性関連の集会を中心にしたイベント案内である「情報クリップ」（火・水・金曜日）や著名人（多くは男性だが）が名著などの解説をする「○○さんと△△を読む」などが分類される「文化」が二〇％で第二位を占めている。そして、家庭面の投書欄としては〝老舗〟の「ひととき」（連日）や家庭でのおかしなできごとをつづった「さて・おや・しかし」（毎日曜日）などからなる「投稿」と、現場の第一線で働く女性たちの仕事ぶりやライフスタイルを紹介する「おんな輝いて」（毎火曜日）や、「くらしのマネー学」（毎木曜日）といった経済に関するもの、「眠っている衣料を難民に　広がる運動東京にも窓口」（一〇月一一

表3　1985年分類項目別家庭面の記事内容

a：朝日新聞

分類項目	記事件数(件)	比率(%)	記事見出し例
社会	43	※④13.7	おんな輝いて（1日，8日，15日，22日，29日），アル中克服へ連帯（3日），主婦の仕事探し（4日），眠っている衣料を難民に（11日），市民運動も電算機時代に（13日），増えるクレジットカード多機能化進む（20日），米国で深刻な老人いじめ（27日），暮らしのマネー学（3日，10日，17日，25日）
自然・環境	3	⑩ 1.0	種とり保存のコツ（15日），園芸ごよみ11月（18日），コガネムシの大発生に注意（21日）
医療・科学	12	⑦ 3.8	おなかの石（8日，9日，10日，12日，14日，15日），スポーツ始める前体の検査や相談を（9日），心身健康まず食から（29日）
生活	67	①21.3	秋はやはりサンマ（2日），男の腕まくり（3日，10日，17日，25日），コート代用のスーツ（4日），暮らし再考（3日，10日，17日，25日），エプロンをつくりませんか（19日，21日），綿コートで暖かく優美に（28日），おそうざいのヒント（連日）
教育・育児	33	⑥10.5	赤ちゃんと楽しく（1日，8日，15日，22日，29日），非行少年たちが立ち直った（8日），教室で豚を食べる（16日），えー寸劇の出前でございい注文待つ「男の子育てを考える会」（17日），学校にいきたい（21日，22日，23日，24日，26日，28日，29日，30日，31日）
社会福祉	5	⑧ 1.6	点字ワープロで盲人の活動広がる（2日），映画「花いちもんめ」でボケ老人役千秋実さん（5日），高齢女性用の既成衣料品（13日），ニューヨーク最先端（19日）
人生	1	⑪ 0.3	女らしさなんて嫌い（1日）
文化	63	②20.1	女のインデックス（1日，8日，15日，22日，29日），母と子の試聴室（4日，11日，18日，25日），別役実さんとシャーロックホームズをよむ他（6日，13日，20日，27日）小原流の流れを一望に（26日），絵手紙描いて365日（30日），本だな（不定期），情報クリップ（火・金・日）
女性学・運動	4	⑨ 1.3	日本の看護婦の歴史をたどる（15日），西暦二〇〇〇年へ向けて（16日），結婚しても別姓選べたら7割（22日），頑固でも理念貫く―40年迎える婦人有権者同盟―（26日）
投稿	44	③14.0	よむ（6日，13日，20日，27日），一筆啓上（5日，12日，19日，26日）さて・おや・しかし（6日，13日，20日，27日），ひととき（連日）
その他	39	⑤12.4	10月（1日），落ち葉の上（6日，13日，20日，27日），わが町（6日，13日，20日，27日），小説・雲の宴（連日）
合計	314	100.0	

※○番号は記事頻度順位を表す（以下表4まで同様）

b：毎日新聞

分類項目	記事件数(件)	比率(%)	記事見出し例
社会	36	⑤10.5	わかりやすい年金学（1日，8日，15日，22日，29日），ニットの巨人“日本進出”（2日），ＡＩＤＳどこまで？（11日），「私たちの飽食」で討議（14日），女子学生の就職（21日，22日，23日），新しい養子制度の夜明けに一歩（28日）
自然・環境	7	⑨ 2.0	季節のこばこ（1日），四季のいろどり（2日，9日，16日，23日，30日），ぐりーんらいふ　私の菜園日記(20日)
医療・科学	12	⑧ 3.5	「口の周辺」の心身症（2日），あなたのカルテ（4日，11日，18日，25日），がん・謎ときの旅（4日，11日，18日，25日），子どもの腰痛（17日），適切な運動は（18日），標準体重（25日）
生活	63	②18.4	食べ物抄（3日，10日，17日，24日），張り替えるなら今がチャンス（4日），素材で考える（5日，12日，19日，26日），男の朝のおしゃれ（6日），この秋，メークはバロック調（13日），毎日夫人（8日，14日，20日，27日），押し入れの中にしまってある残り毛糸で編もうレッグウォーマー（27日），食卓の一品（月～木）
教育・育児	44	④12.9	コンピュータは教育を変えるか（1日，2日，3日），日教組の教育改革案シンポ（3日），ママの目医者の目（5日，12日，26日），算数そこが知りたい（6日，13日，20日，27日），障害児のための就学ホットライン（10日）
社会福祉	16	⑦ 4.7	トーク老い（1日，8日，15日，22日，29日），生き生き自立「老人の街」（5日），福祉の国の福祉機器（7日），日本ろう者劇団が芸術祭参加公演（12日），日系のお年寄りに故国の味（26日）
人生	7	⑨ 2.0	15年がかり結核卒業（2日），しなやかに挑戦（7日，14日，21日，28日），「菊池寛賞」受賞の田村武能さん語る（14日），女に生まれたのは幸せか（30日）
文化	71	①20.9	トニー・アンド・ガイの新作ヘア・ファッションショー（1日），アン・ペッパーの旅に学ぶ（1日，8日，15日，22日，29日），母と子のレコード（2日，9日，16日，23日，30日），私の本との出会い（14日～16日），能登島「たくみの里」（20日），話題を呼ぶドラマ「教員室」（21日），化粧（25日～31日），ほん（不定期）
女性学・運動	1	⑪ 0.3	夫婦の姓について（21日）
投稿	36	⑤10.5	すきな先生　きらいな先生（6日，13日，20日，27日），読者の手記（27日），女の気持ち（連日）
その他	49	③14.3	蝶々のつづればなし（2日，9日，16日，23日，30日），まち・ひと・はなし（6日，13日，20日，27日），小説・柳生兵庫助（連日）
合計	342	100.0	

c：読売新聞

分類項目	記事件数(件)	比率(%)	記事見出し例
社会	24	⑤ 7.1	働きたいあなたへ（1日，8日，15日，22日，29日），ワーキングウーマン内外事情（1日，8日，15日，22日，29日），遺言―意識と実態（4日），欧州毛皮日本に上陸（5日），負担多いVDT作業（8日），個人貯蓄指南します（17日），ご注意キャッチセールス（27日）
自然・環境	8	⑧ 2.4	季節の手帳（3日，10日，17日，24日），みんなの園芸（4日，11日，18日，25日）
医療・科学	14	⑥ 4.2	ガンと生きる（4日，11日，18日，25日）健康カレンダー（13日），安くかかれる高度先進医療（13日），自律訓練法（15日），体重をチェックする健康器具（23日）
生活	99	①29.2	安全ですか（3日，10日，17日，24日，31日），白髪さあおしゃれを（4日），生活メモ（5日，12日，19日，26日），住まいの手入れQ&A（6日，13日，20日，27日），この秋着くずしファッション（12日），台所（連日），きょうの料理（月～土）
教育・育児	10	⑦ 3.0	お話ひとこと（7日，14日，21日，28日），すくすく育児メモ（7日，14日，21日，28日），わが子を本好きに（14日），いじめ解決へ訴え（21日）
社会福祉	6	⑨ 1.8	高齢化社会と住まい（2日），お年寄り介護のヒント（6日，13日，20日，27日），やはり違うスウェーデン（9日）
人生	1	⑪ 0.3	ひと，しごと（1日）
文化	74	②22.0	女性ライブラリー（4日，11日，18日，25日），ぐるめ（5日，12日，19日，26日），私のAVルーム（5日，12日，19日，26日），いきいきタイム（6日，13日，20日，27日），母と子の図書室（7日，14日，21日，29日），パリ・プレタポルテ・コレクション（30日），親と子のミュージック（不定期），本だな（不定期）
女性学・運動	2	⑩ 0.6	女性雑誌の現在（9日），国連婦人の十年総括シンポジウム（16日）
投稿	74	②22.0	投書特集シェイプアップ（3日），ヘレンおばさんのなんでも相談（6日，13日，20日，27日），女の詩　女のうた（5日，12日，19日，26日），赤でんわ（不定期），人生案内（月～土），こどもの詩（月～土）
その他	25	④ 7.4	まんがちっくランド（2日，16日，30日），11月のしおり（31日），おことわり…休載のお知らせ（31日），お茶の間スポット（不定期）
合計	337	100.0	

日）という社会運動を扱った記事などによる「社会」が、ともに一四％で三位四位にきている。

毎日では、時に応じて掲載される女性関連のイベント案内や、「テーマ特集　私の本との出会い」（一〇月一四、一五、一六日）、「話題を呼ぶドラマ『教員室』」（一〇月二一日）、「アン・ペッパーの旅に学ぶ」という米国人のトラベルライターによるエッセイ（毎火曜日）などを含む「文化」が二一％で最も多く第一位を、次に「食卓の一品」（月～木曜日）、「素材で考える　家庭料理講座」（毎土曜日）、「この秋、メークはバロック調」（一〇月一三日）、「押し入れの中にしまってある残り毛糸で編もう　レッグウォーマー」（一〇月二七日）など、衣・食・住に関する記事を中心とした「生活」が一八％で第二位を、主として連載小説（津本陽「柳生兵庫助」）やエッセイの「蝶々のつづればなし」が頻度を高めた「その他」が一四％で、第三位を占めている。

読売では、朝日の「おそうざいのヒント」、毎日の「食卓の一品」にあたる「きょうの料理」（月～土曜日）、連載ものの「台所」、「白髪　さあおしゃれを」（一〇月四日）、「住まいの手入れQ&A」（毎日曜日）などからなる「生活」が、三紙中最も多く二九％を占め、第一位である。次いで多いのが、「赤でんわ」（週に五、六回）や歴史の古い人生相談コーナーである「人生案内」（月～土曜日）、それに毎木曜日にテーマを特定して掲載される「投書特集」などが含まれる「投稿」で、二二％を占めている。また、同数で、「母と子の図書室」（毎月曜日）、「私のAVルーム」（毎土曜日）、家族や高齢者で楽しめるゲームなどを紹介する「いきいきタイム」（毎日曜日）などの余暇関連記事の多い「文化」（二二％）がそれに並んでいる。

ちなみに、毎日で「教育・育児」が一三％と四番目に多くなっているのは、週一回（木曜日）、「家庭」面の一ページ分が「みんなの教育」というサブタイトルで編集されているためである。毎週日曜日にも「算数そこが知りたい」といった約半ページ分をついやした教育関連の記事がみられ、「教育の毎日」の面目躍如としている。また読売の「投

稿」が他紙に比べて大きな割合を占めているのは、上記の投稿記事のほか、子どもの詩（月～土曜日）と「女の詩女のうた」（毎日曜日）の二つの詩の投稿欄が常設されていることによっている。読売は、多様な角度から、読者の〝声〟を反映しようとしているといえようか。

朝日では、「女性学・女性運動」に分類された項目件数が三紙の中で最も多く四件で（読売は二件、毎日は一件）、その内容は、看護学・女性学の研究者亀山美知子さんによる「日本の看護婦の歴史をたどる　研究の成果四巻の本に」（一〇月一五日）、「男女平等シンポ　西暦二〇〇〇年へ向けて」（一六日）、夫婦別姓をすすめる会の活動内容を伝える記事（二二日）、婦人有権者同盟の四〇周年に関する記事（二六日）であり、他紙に比べれば八〇年代に活性化したフェミニズムの動向への目配りが伺える。

このように、各紙ごとにある程度の独自性がみられるものの、むしろここで着目すべきなのは、三紙ともに「生活」が二～三割を占め、「文化」が二割、「投稿」が一～二割、「社会」が一割、小説など「その他」が一～二割でそれに続くという構成において変わりがない、という点であろう。どの新聞も衣・食・住に関する動向や実用記事からなる「生活」、私的な生活や心情の吐露からなる「投稿」、女性に関するイベント案内や子ども・女性向けの本やレコード紹介からなる「文化」の三分野合わせて、家庭面の記事総件数の五～七割を占めている。この三分野に、大きなウェイトが置かれていたことが、八五年の家庭面の最も大きな特徴であったといえよう。

2　一九八六年の家庭面の構成

それでは、男女雇用機会均等法実施以後の一九八六年同月分の家庭面はどのような構成になっているであろうか。

そこには何らかの変化がみられるであろうか。

まず最初に注目すべきは、八五年は「婦人とくらし」となっていた読売の家庭面が、八六年には「家庭とくらし」と名称を変更した点である。旧「婦人とくらし」面は、八六年四月三〇日までこの名称で続けられ、翌五月一日から、読売が電子的な新編集システムを採用し、紙面を刷新したのにともない、「家庭とくらし」へと変更された。これによって、一九一四年にはじまった「よみうり婦人附録」以来の「婦人」という面建てが、消えた。「政治」「経済」「スポーツ」「社会」など、新聞の題材別の面建ての中で、唯一家庭面のみ実質的に「性」別の面建てがなされていることには、それまでも批判や異和感が表明されていた。たとえば、共同通信社の中村輝子氏は、この面だけが性のカテゴリーで、読者も記者も〝棲み分け〟るあり方に、送り手の側として疑問を呈している。[9] 読売のこの措置は、名称変更についての社告のようなものは出なかったものの、性役割を固定化するようなマスメディア報道を自省し、〝男性も読む家庭面〟として紙面を開放しようとする姿勢のあらわれとも考えられる。

次に表4で八六年の三紙の家庭面の総記事数をみてみると、朝日が三〇〇件強で、八五年と同水準であるのに対し、毎日、読売では、総記事数は大きく増えて、四〇〇件を超えるまでになっている。これは、八五年にはなかった「碁」「将棋」のタイトルマッチ記事が毎日で週三回位、読売ではほぼ連日、家庭面に掲載されるようになっていたことが大きな原因となっている。

分野別構成比を各紙別にみると、朝日では、月一回掲載の「くらべてみたら　商品テストから」に載った、超小型補聴器とステンレス包丁のテストについての雑誌からの引用記事（一〇月一〇日）や、ファッション評論家石津謙介の「五〇歳からのおしゃれ」（毎土曜日）、「おそうざいのヒント」「男の腕まくり」などを含む「生活」が、昨年と同様二一％で第一位にくる。続いて、ニューヨーク在住の女性の写真家が撮り続けてきた「日系一世の老い見つめる」（一〇

表4　1986年分類項目別家庭面の記事内容

a：朝日新聞

分類項目	記事件数(件)	比率(%)	記事見出し例
社会	58	②19.0	いじめに負けてはダメ（1日），講談「均等法物語」（2日），日系一世の老い見つめる（4日），フィリピンハンセン病の村　この現状を知って（5日），利殖の時代（7日，8日，9日），働く女からの手紙（7日，14日，21日，28日），男から女へ（7日，14日，21日，28日），女から男へ（2日，9日，16日，23日，30日），切り抜き情報で社会を見る（23日），日本の救助隊も頑張った（25日），南博さんが見た中国の青年（29日）
自然・環境	2	⑩ 0.7	幻のユリ（1日），園芸ごよみ（24日）
医療・科学	12	⑦ 3.9	歯科用金属（10日），腎臓をいたわる（13日～16日，18日，20日～23日，25日）
生活	65	①21.3	男の腕まくり（1日，8日，15日，22日，29日），50歳からのおしゃれ（4日，11日，18日，25日），お年寄りクッキング（4日），宗教に応じて僧派遣します（10日），初めてでも失敗しないマドレーヌ（22日），おそうざいのヒント（連日）
教育・育児	16	⑥ 5.2	うちの先生（1日，8日，15日，22日，29日），赤ちゃんと楽しく（7日，14日，21日，28日），「オートバイに乗りたい」子どもに言われたら（8日），母乳育児の具体例いっぱい（9日），くらべてみたら　商品テストから（10日），公民館が子供料理教室（14日）
社会福祉	10	⑧ 3.3	「痴呆性老人とともに」出版（8日），障害にあわせ工夫（13日），心触れあって「さをり織り」15年(17日)，カメラが語る老人ホーム100年（18日）
人生	0	0	
文化	43	⑤14.1	男のインデックス（2日，9日，16日，23日，30日），副田義也さんと忍者武芸帳をよむ他（5日，12日，19日，29日），女のインデックス（7日，14日，21日，28日），人形が語るアメリカの生活家庭史（28日），食の図書室に人気（30日），情報クリップ（火・水・金）
女性学・運動	3	⑨ 1.0	レディスコミックはパターンがお好き（6日），男女の体育授業時間差別はもう時代遅れ（22日），高校家庭科教科書　女性観の変遷をたどる（29日）
投稿	45	④14.8	明るい悩み相談室（1日，8日，15日，22日，29日），ひとときレポート（3日），一筆啓上（4日，11日，18日，25日），さて・おや・しかし（5日，12日，19日，26日），ひとと き（連日）
その他	51	③16.7	北向きの窓から（5日，12日，19日，26日），わが町（5日，12日，19日，26日），小説・雲の宴（連日）
合計	305	100.0	

b：毎日新聞

分類項目	記事件数(件)	比率(%)	記事見出し例
社会	29	⑥ 7.2	中古マンションも驚騰（3日），米マジソン市にみるレイプ対策（6日），お年寄“介護疲れ殺人”（7日），やがてくるＩＣカードの時代（7日），ちょっと変わった保護運動（15日），働く女性2367万人（22日）
自然・環境	20	⑧ 4.9	花とみどり（1日，8日，15日，22日，29日），路傍の草花（12日～16日，19日～23日，27日～30日），グリーンライフ　私の菜園計画（19日）
医療・科学	27	⑦ 6.7	あなたのカルテ（3日，10日，17日，24日，31日），エイズ診療半年の報告（3日），虫垂炎（4日），やせる＆ヘルシー（6日，13日，20日，27日），進む“生殖技術”を警戒（27日）
生活	90	②22.2	House 全科（3日，10日，17日，24日，31日），森南海子の手縫いを一緒に（5日，12日，19日，26日），食べ方いろいろイワシはいかが（4日），一人用のそうざいテストしたら（6日），七・五・三　古典柄がウケる女児の着物（13日），おしゃれのポイントヘアパックのすすめ（27日），毎日夫人（不定期），食卓の一品（月～木）
教育・育児	43	④10.6	実地調査で学ぶ「現代社会」（2日），ママの小児科ＡＢＣ（2日，9日，16日，23日，30日），子供ＮＯＷ（2日，9日，16日，23日，30日），子ども人権110番（5日），高校新聞の特集記事分析結果（9日）
社会福祉	9	⑨ 2.2	訪問看護（3日），ワットさんの笑って長生き（2日，10日，17日，24日，31日），体調整え無理はやめて（5日），難民救援のＸ’マスカード（6日），高齢者の連帯と自立のために（8日），障害持つ仲間に勇気を（23日）
人生	1	⑪ 0.2	救われた私　結核だって必ず直る（1日）
文化	99	①24.5	母と子のレコード（1日，8日，15日，22日，29日），熟年からヤングまで童謡ブーム（8日），変わってきた公共図書館（9日），良質の和紙よみがえる（12日），第32回アマチュア本因坊戦（不定期），第45期名人戦（不定期），こまおと（不定期），ほん（不定期）
女性学・運動	2	⑩ 0.5	“両性現象”目立つ女性雑誌（2日），いま婦人団体は何をなすべきか（22日）
投稿	32	⑤ 7.9	読者の手記（26日），女の気持ち（連日）
その他	53	③13.1	水曜日のひとりごと（1日，8日，15日，22日，29日），来週のこよみ（4日，11日，18日，25日），小説・蒙古襲来（連日）
合計	405	100.0	

c：読売新聞

分類項目	記事件数(件)	比率(%)	記事見出し例
社会	41	④10.1	強引な人名録商法（2日），ジーンズが届いた！個人輸入に，挑戦（3日～18日），働く母親と家族の意識（6日），“インドシナ難民に職場を”（15日），マルチ商法いぜん横行（16日），リポート再就職（20日）
自然・環境	12	⑧ 2.9	やさしい植物学（3日），四季のたより（4日，11日，18日，25日），秋植えの球根（17日），もう冬の鳥・都鳥（18日）
医療・科学	18	⑤ 4.4	ガンと生きる（3日，10日，17日，24日，31日），おかあさんのパソコン教室（4日，11日，18日，25日），太りすぎは飛べません（7日），脳の老化（19日），勤めながらの妊娠（20日）
生活	63	③15.5	近所づきあい大好き（1日），男のおしゃれ楽（1日，8日，15日，22日，29日），大辛ばやりちょっと心配（3日），生活メモ（4日，11日，18日，25日），在日外国人面白食卓（5日），ハウジング（7日，14日，21日，28日），電子レンジの掃除で感電（15日），リサイクル・らいふ（30日），きょうの料理（月～土）
教育・育児	18	⑤ 4.4	スウェーデンの“父の育児休暇”（6日），わが家の子育て（6日，13日，20日，27日），子どもの性Q&A（6日，13日，20日，27日），育児ABC（7日，14日，21日，28日），パソコン使い“アメリカ留学”（29日）
社会福祉	2	⑨ 0.5	デイ・サービスが問題（12日），ひと・しごと（20日）
人生	2	⑨ 0.5	心からお祝いできた披露宴（11日），世界一多くファッション写真とる男（18日）
文化	160	①39.3	あなたもどうぞ紙芝居（5日），淑女のミステリー（5日，12日，19日，26日），母と子の図書室（6日，13日，20日，27日），歌人生方たつゑさん「記念文庫」開館（21日），ビスクドール展に140体集合（31日），親と子のミュージック（不定期），棋聖戦（連日），十段戦（連日），「こどもの城」で1周年記念行事（31日）
女性学・運動	0	0	
投稿	75	②18.4	こだま（1日），女の詩　女のうた（5日，12日，19日，26日），ヘレンおばさんのなんでも相談（5日，12日，19日，26日），人生案内（火～土），赤でんわ（不定期）
その他	16	⑦ 4.0	気どらない話題できっかけ（4日），11月のしおり（30日）
合計	407	100.0	

月四日）、マネー・ブームの社会背景について論じた「利殖の時代」（一〇月七日、八日、九日）、個人生活への関心が高まり、雑誌の恋愛テストなどを楽しむようになった中国の若い人たちについてリポートした「南博さんが見た中国の青年」（一〇月二九日）などの「社会」が一九％で第二位となる。第三位は「読者とともに」という社告や連載小説（昨年と同様辻邦生「雲の宴」）、エッセイ「北向きの窓から」などを含む「その他」であり、一七％となっている。

毎日では、図書館の各種サービスの動向（CDの貸し出しや対面朗読など）を紹介した「変わってきた公共図書館」（一〇月九日）や、イベント案内、本の紹介、碁、将棋を含む「文化」が二五％で第一位に来ているが、二二％という僅差で、リフォームや裁縫の実用記事である「森南海子の手縫いを一緒に」（毎週日曜日）や「七五三　古典柄がウケる女児の着物」（一〇月一三日）、「食卓の一品」などからなる「生活」がそれに続いている。そして、小説（山田智彦「蒙古襲来」）やエッセイ「水曜日のひとりごと」、「来週のこよみ」などの「その他」が一三％で第三位となっている。

読売では、「母と子のミュージック」「母と子の図書室」、イベント案内など不定期掲載の紹介記事や「『こどもの城』で1周年記念行事」（一〇月三一日）という記事、それに「碁」や「将棋」などを含む「文化」が、他分野に比較してとびぬけて高く三九％と第一位となった。第二位、第三位はその約半分の頻度で、「投稿」の一八％、「ハウジングモノに奪われる居住空間」（一〇月二一日）、デンマーク人の食事を紹介した「在日外国人面白食卓」（一〇月五日）、出口尚三（ファッション評論家）による「男のおしゃれ楽」（毎水曜日）、それに「きょうの料理」などがカウントされた「生活」の一六％が続いている。

以上の結果を八五年と比べてみると、三紙とも「文化」「生活」「投稿」の三分野が上位項目であることには大きな違いは生じていない。しかしながら、各分野のパーセンテージには多少の変化がみられる。

まず、毎日、読売の「文化」の増加には、「碁」「将棋」が加わったことが影響している点は前述した通りである。

また、毎日で「生活」が微増し、読売で「生活」が大きく減った点が目につく。その内容をみてみると、毎日では、「住まい」（毎金曜日）や「リサイクル情報」（毎土曜日）の新設を始めとする〝くらし〟に重きをおいた生活関連記事が増えたのに対し、読売では昨年の「台所」や「住まいのQ＆A」のような〝住まい〟に関する生活関連記事が見当たらなくなっている。その分読売では「わが家の子育て」（毎月曜日）等「教育・育児」のほか、「脳の老化」（一〇月一九日）など健康に関する記事や「お母さんのパソコン教室」（毎土曜日）などの「科学・技術」が、わずかながら増えている。

朝日では、障害をもった人による「フィリピン　ハンセン病の村　この現状を知って」（一〇月五日）という訪問レポートや、「胎児性水俣病患者が小工房で紙漉き」（一〇月三日）など、八五年にはあまりみられなかったドキュメンタリー的な要素の強い記事が加わった「社会」がやや増加した。この「社会」には、「働く女からの手紙」（毎火曜日）や、「男から女へ」（火）と「女から男へ」（木）もカウントされているが、これらは、匿名の評論家などが身辺で起こったできごとや折りにふれて考えたことを辛口でつづった前年の「女から女へ」（毎火曜日）が、両性の読者へ向けてより発展したものともいえよう。その一方で、「本だな」という女性向けの本の紹介コーナーがなくなったため「文化」が、また昨年一〇月二一日以降の連載記事「学校に行きたい」がなくなっているため「教育・育児」が、それぞれやや減じている。

このように、八五年と八六年とでは、「文化」「生活」「投稿」といった家庭面の紙面構成にはとりたてて大きな変化はみられず、三分野合わせて五～六割と、記事量もそれほど変わらないものの、各紙の八五年との違いを特化してみると、毎日はより〝くらし〟を中心に据えるようになり、読売はより〝文化情報〟性を強め、朝日は若干ではあるが〝社会〟性を強めているようにもみうけられる。これらの傾向が、各紙の独自路線の始まりであり、変化が継続して行くのかどうかは、今後の調査に待たねばならないが、印象からすると、一九九〇年の現在になってもなお、内容的に

それほど大きな変化が生じているようには思われない。

3　多様な情報が詰め込まれた家庭面

以上でみたように、三紙共通して「文化」「生活」「投稿」の三分野のウェイトが比較的高いとはいえ、この三分野のみならず、他の七分野にもわたる多様な情報が、この面に掲載されている実態にもここで注目しておきたい。八五年、八六年および三紙を通じて、程度の差はあれ、あらゆる分野の記事が掲載されている点が、家庭面の大きな特徴の一つとなっているのである。

具体例として、八六年一〇月一五日の読売新聞「家庭とくらし」面をとりあげてみると、その紙面は、①「電子レンジの掃除で感電」、②「しっとり　秋のヘア」、③「男のおしゃれ楽」、④「きょうの料理」、⑤「お知らせ」（イベント案内）、⑥「棋聖戦」（碁）、⑦「十段戦」（将棋）、⑧「あたま」（子どもの詩）、⑨「〝インドシナ難民に職場を〟」、⑩赤でんわ「花の情愛いま実感」、⑪「ジーンズが届いた！個人輸入に挑戦」、⑫本「中国女性事情」、⑬人生案内「夫の酒やめさせたい」、といった記事群から成り立っている。この日一日を見ただけでも、家事、おしゃれ、レシピ、イベント案内、趣味、創作、社会記事、くらしの経済、政治、文化、深刻な悩み相談など、様ざまな次元の様ざまな分野の記事が詰め込まれていることは一目瞭然である。

一つの面の中でこれほど沢山のテーマの違う記事が同居することは、政治面やスポーツ面や商況面など、争点・できごとの分野別面建てになっている他の多くの面では考えられないことだろう。多様な領域にわたる出来事を扱った一面の「総合面」や、「社会面」でさえ、掲載されている記事の分野は、おおむね四〜五種類といったところである。

ちなみに、この紙面傾向には最近も変化がみられず、たとえば女性のグループを紹介した「おんなの輪」（読売一九八九年一〇月二日～）や「イラク　復興に女性の意気」（読売八九年一〇月一〇日）といった記事、「女性と選挙　国会の中で―党派越えて協調を確認」（朝日八九年一〇月五日）などに典型的にあらわれているように、総合面や国際面、政治面的な内容の記事が、女性関連ということで家庭面で扱われる現状がいまでも続いている。

このような家庭面の様相を、袖井孝子氏は、「ゴッタ煮」と評した。[10] こうした〝ゴッタ煮〟性の最大の問題点は、たとえば「新しい養子制度の夜明けに一歩　民法改正試案の意味」（毎日八五年一〇月一八日）といった法律問題、「テクノストレス　負担多いVDT作業」（読売八五年一〇月八日）といった労働問題、「利殖の時代」（朝日八六年一〇月七日～九日）などの経済問題、「日本の救助隊も頑張った　エルサルバドルの大地震」（朝日八六年一〇月二五日）の国際問題等、本来男女の別なく論じられるべき内容が、女性が登場するからという理由で、「なんでも家庭面に放り込」まれてしまうからである。その結果、前述したような家庭面の読者層に性による偏りがみられるという現状においては、「これらの問題が男女の別なく、……ひとりひとりにかかわる重要な課題であるという読者の認識」[11]が妨げられてしまうことになる。

4　女性向け内容にかたよる家庭面

〝ゴッタ煮〟的性格ともかかわる現在の家庭面の、もう一つの大きな特徴は、やはり紙面内容が相も変わらず女性向けにできている、という点である。読売が「婦人とくらし」面を「家庭とくらし」面へと呼称変更したのを最後に、日本経済新聞を除き、ほとんどの新聞は「家庭面」のことを「婦人面」と呼ぶのをやめた。こうして「婦人面」が

「家庭面」へとシフトしてゆく段階では、女性に関することがらや女性向け情報は全て婦人面へという発想が捨てられ、〝家庭〟や〝生活〟や〝くらし〟とは、本来性別にかかわりない人間の関心事である、という新しい考え方にもとづいて面建てが構想されたはずである。冒頭に紹介したように、家庭面の閲読者の大多数は女性であるという現象があっても、「男性にも開かれた家庭面」を標榜するのならば、当然男女両方の読者に向けて記事づくりがなされてしかるべきだろう。だが、はたして各紙の実際の紙面づくりは、こうした視点の転換が明確に反映されたものになっているのだろうか？

この点を調べる一つの方法として、一定の固定読者が想定されて

表5　「女」や「母」がつき，女性が読者と想定されている連載記事のタイトルおよび「男」がつき，男性が読者と想定されている連載記事のタイトル

1985年

	女性読者向けタイトル	男性読者向けタイトル
朝日	○女のインデックス ○女から女へ ○おんな輝いて ◎母と子の試聴室	男の腕まくり 男のインデックス
毎日	◎母と子の図書室 ◎母と子のレコード ◎ママの目　医者の目	
読売	○女性ライブラリー ○ワーキングウーマン内外事情 ○女の詩　女のうた ◎母と子の図書室	

1986年

	女性読者向けタイトル	男性読者向けタイトル
朝日	○女のインデックス ○働く女からの手紙	男の腕まくり 男のインデックス
毎日	◎ママの小児科ＡＢＣ ◎母と子のレコード	
読売	○淑女のミステリー ◎母と子の図書室 ◎おかあさんのパソコン教室	男のおしゃれ楽

○印は「女（ウーマンなども含む）」の付くタイトル
◎印は「母（ママなども含む）」の付くタイトルを表す

いるとおもわれる一〇月時の「連載もの」のタイトルから、明示的に対象読者の性別があらわされている「女」「母」のつくタイトルと、「男」「父」のつくタイトルを数えてみた。その結果、「女」「母」がタイトルに付く連載記事は、八五年の朝日で五本、毎日三本、読売四本、八六年では朝日四本、毎日二本、読売三本だったのに対し、「男」「父」の付く連載ものは、八五年の朝日で二本、毎日〇本、読売〇本、八六年は、朝日二本、毎日〇本、読売一本、というアンバランスが見出された。表5は、「女」「母」の付くタイトルの一覧であるが、「男」の付くタイトルは朝日「男の腕まくり」（八五年、八六年）、朝日「男のインデックス」（八五年、八六年）、読売「男のおしゃれ楽」（八六年）のみで、「父」の付くものはゼロである。女向け・男向けの情報というように分けられること自体が問題だともいえるが、少なくとも「家庭面」ということで両性が想定されているのならば、「男の〇〇」「父と△△」も、「女の□□」或いは「母と××」と同等に登場してもよさそうなものである。

各紙別にみると、朝日は「女」を使ったタイトル（〇印つき）が他紙よりも多めで八五年は三本、八六年は二本みられ、「母」を冠したもの（◎印）は八五年の「母と子の試聴室」一本である。それに対して毎日は、逆に、「母」を使用した連載タイトルが多く、八五年には三本、八六年には二本みられたが、「女」を使ったタイトルは皆無であった。一方、読売は、「女」を使ったものが八五年三本、八六年一本、「母」使用タイトルは、八五年に一本、八六年に二本であった。朝日は〝女性一般〟を意識し、毎日は〝母親〟を意識、読売はその中間といったところだろうか。

「女」「母」使用タイトルの各紙ごとの合計本数を、八五年、八六年の両年で見比べてみると、朝日で二本、毎日、読売で一本ずつではあるが「女」「母」ものの連載タイトルが減じている。この点からみると、〝女性向け連載記事〟と明示されるものが減るトレンドにあるようにもみえる。そして読売では八六年に「男」がつく男性向けタイトルが新たに一つ増えている。また、表5には記されていないが、石津謙介の連載「50歳からのおしゃれ」（八六年、読売）も

男性向けの内容である。このように「女の」と明示されたタイトルが減少し「男の」と付くタイトルや男性向け連載が若干ではあるが増える傾向が両年の間に確認された点は、家庭面における性役割が流動化しているようにみえて興味深い。

さらに、八六年に入って新設された朝日の「女から男へ」と「男から女へ」のコーナーは、女性の発言者、男性の発言者がそれぞれ異性にむけ、コミュニケートすることを試みているが、両性の関係性を問い直す契機が含まれている点で評価されよう（なお、この記事のタイトルには、「女」と「男」がついているが、男女両方へ向けて書かれていることが明らかなので、表5には掲げなかった）。このような記事の出現の背景には、男女雇用機会均等法の成立が明らかに影響していると思われる。だがその後、一九九〇年の現在、〝男性向け連載記事〟の試みもそれほど進展したようにはみえず、読売で木曜日付が「男のページ」と命名され、「ラブレター『男よ』」というコラムや、朝日で両性が対談形式で登場する「男Ｓａｙ　女Ｓａｙ」がみられる程度なのは残念である。

以上みてきたような連載記事以外でも、家庭面には、「女」がつく女性のための記事が多く見られる。たとえば、「女らしさ復活　１９８７年春夏もの　イタリア・コレクション」（朝日八六年一〇月三〇日）や、「女が語る一流企業101社の日常『新ＯＬ図鑑』が人気」（読売八六年一〇月二七日）、などはその例である。また、タイトルに「女」や「母」を冠していなくても、明らかに女性を対象としているものも多く見ることができる。一例として「老眼鏡がアクセサリーに」（毎日八六年一〇月一日）というタイトルの記事を読み進めていくと、「ミセス」のアクセサリーとしての老眼鏡の話になっており、中年男性にとってはどうなのかという記述は一言もない。さらに、「男の朝のおしゃれ　あなたはカミソリ？電気？」（毎日八五年一〇月六日）の記事などは、一見すると男性向けとも受け取れるが、その内容は、おもに女性に対し男性のヒゲのメカニズムを教えるという記述になっており、後半では「働き盛りの夫を持つ奥様にひ

とつアドバイスしたいのは、夫の〝顔色を見る〟ということ。……顔の色、ツヤを朝夕見て健康管理をしてあげて下さい」と、妻に夫へのサービスを促している。

そのほか、両性に開かれた紙面づくりがなされているとはいえない点として挙げられるのは、家庭面に設けられた常設投書欄への投書者が女性に限定されている場合が多いことであろう。たとえば、今回の調査で用いた三大紙の場合、毎日の「女の気持ち」や朝日の「ひととき」などは、いずれも女性に投書者を限定しており、この点からみても、家庭面が男性に開放されているとはいい難い。

このように家庭面は、「婦人面」という呼称でこそなくなったものの、その記事内容の持つ〝女性度〟には相変わらず高いものがあり、男性の読者に開かれた紙面づくりになっているとはいいがたいのである。

Ⅲ　家庭面存廃をめぐる実証的考察

1　ジェンダーによる情報区分け

前節までで家庭面が相変わらず女性のための面、すなわち「婦人面」的色彩から脱け出ておらず、そのため家庭面といいながらも、「家庭」というものを女性の領域ととらえ、女性を対象とした紙面づくりが多くなされているという実態をみてきた。

女性を対象とする面があってなぜいけないかという疑問に対しては、まず、女性の〝囲い込み〟、という点を挙げたい。何故、新聞のページで、男性にはないのに女性だけの特別あつらえの席が必要なのだろうか。それとも他の普通の面は一般の人＝男性が読むものと、暗黙のうちに措定されているのであろうか。〝女性向け情報〟をより分けて、

一貫したテーマなくこの面に投入することで、情報および女性の読者に関する、ある種の〝囲い込み〟（女性はこの面ばかり読み、男性はこの面をよけて通る、といったような）が行われてしまうのである。つまり女性に関することは何でも家庭面に放り込む〝ゴッタ煮〟性は、結果として男性読者を家庭面からさらに遠ざけさせ、女性読者を政治面や経済面から疎遠にさせる効果をもたらすのである。

また家庭面についての論考が行われる時にしばしば指摘されるように、[12] 他の面建てとの整合性という点でも女性向け面の存在は奇異に映る。通常、新聞の紙面は、政治、経済、労働、教育、文化、スポーツといったテーマごとに構成されているが、これらのテーマの中に既に老若男女すべての人の情報が入り込んでいる筈である。ことあらためてこの中から女性と政治、女性と経済、女性と文化などの報道を抜き出して別の面を構成するのであれば、若者面、男性面、子ども面といった〝対象〟別紙面がもっと作成されてもよさそうなものだ。テーマ別紙面構成の新聞編集の中にあって、ひとつだけ対象別ページが存在することは、新聞自体が女性を意識的・無意識的とにかかわらず特別視していることのあらわれ、といえるかもしれない。もちろん、これは新聞側の責任ばかりではない。「家庭のことは女」という、一般の風潮つまり性役割分業観そのものが、まだまだ根強いのであるから。しかし、NHKの日本人の意識調査[13]をみても、女性は「結婚したら家庭を守ることに専念したほうがよい」と考える人の男女合計比率は、一九七三年三五％、七八年三〇％、八三年二九％、八八年には二四％と、一五年間で一〇％以上減少し、夫の台所仕事についても「台所の手伝いや子どものお守りは、一家の主人である男子のすることではない」と考える人も同様に三八％、三三％、二八％、二二％と大きく後退している。そして、「夫婦は互いに助け合うべきものだから夫が台所の手伝いや子どものお守りをするのも当然だ」が、それぞれ五三％、六〇％、六七％、七二％と、増加の方向で推移している。女性だけをとってみると、それぞれ五一％、六〇％、六八％、七五％とこの比率はより高まる。多分にタテマエ的な

回答も含まれていたようが、たとえタテマエのレベルではあれ、明らかに性別役割分業に対する世論は変わりつつある。しかも本来的には、家庭および生活は男性にとっても無縁のものではあり得ない。むしろ男性が家庭のことを考えずに生きていられることのほうが問題であろう。

一九七五年の国際婦人年世界会議で採択された「世界行動計画」の第四章は、マス・メディアについて以下のように言及している。「現在マス・メディアは、婦人についての旧来の観念を助長する傾向を示し、かつ変化しつつある両性の役割を反映していない」。この文章は、現在の家庭面に対する新聞の姿を表しているといえないだろうか。女性差別撤廃条約の批准も済んだ今、マス・メディアも性差別の除去に努める責任がある。性別役割分業の変革は今みたように世論の上でも支持されているばかりでなく世界的な趨勢でもある中で、新聞が旧態の性役割を是認する紙面づくりをしていては、読者離れ、とりわけ女性の読者層の離反を招来しかねないだろう。新聞協会研究所の全国新聞信頼度調査（一九八九年）でも、新聞の、人びとの意見の取り上げ方の「公平性」や、読者の意思の「反映性」について肯定的な評価を下した女性は、各四一％、四〇％と、男性（各四六％、四四％）よりも低い水準にあることが明らかにされている。[14] 家庭面といえば女性、といった発想では、世論や世界の潮流から取り残されかねない、と言わざるを得まい。今新聞には、女性の現状とニーズを見据えることが求められているのである。同時に、単にニーズに応えるだけでなく、新聞のオピニオン機能をフルに活用して、依然として残る性別役割分業観解消のために世論を喚起しリードする役割も、新聞にはある筈である。

2　家庭面解消の試み

それでは、家庭面における性役割の固定化を解消するためには、どのような改善方法があるだろうか。最近では女性が社会へ出ていこうとするときに障害となるのは、生活者として自立できない身近な男性（夫、父、息子など）である場合が多いことから、男性をもっと積極的に家庭の問題にかかわらせる必要性がいわれ、家庭科の男女共修の運動や「男も女も育児時間を！連絡会」の運動など、具体的な取り組みも起こりつつある。家庭面の見直しについても、これと同様に、男性を積極的に家庭や地域の問題に引き込み、女性を積極的に家庭の外の世界にかかわらせる方策が取られる必要があるのではないだろうか。八〇年代半ば以降、そのような動きが若干紙面上にみられなくはないものの、決して十分とはいい難いことは、既にみた通りである。

このような方向性をさらに積極的におしすすめるには、二つの方向があると思われる。

ひとつは、家庭面の記事を〝他面に出す〟方向である。つまり、現在家庭面に掲載されている記事は、政治、経済、社会、文化、スポーツ、地域など、あらゆる領域に〝ゴッタ煮〟的にわたっているのだから、それらをそのまま政治面や経済面に移行させることが可能な筈である。家庭面の記事は最終的には、全て他面に吸収されるのではないだろうか。ここでは、そうした方向性を「家庭面解消論」と呼ぶことにしたい。本稿Ⅰの最後で触れたように、朝日の「'85男たちの点滅」や毎日の「夫たちの場所」などの連載が社会面に登場したのは、この方向での実践の一つといえるかもしれない。家庭面の内容を他面へ出して行くことによって、多くの人びと、とりわけ今までこの面を開いて見ることもなかった男性に、家庭や生活の問題を考えさせるきっかけを与えることができる筈である。

そこで、家庭面解消の具体的な試みとして、一九八六年一〇月一日（水曜日）朝日新聞の家庭面を採り上げて、記事の移動先を考えてみよう。

この日には、表6に記事見出しを示したように、一一の記事が掲載されていた。まず、①「いじめに負けてはダメ」

表6　朝日新聞1986年10月1日（水）の家庭面記事の他紙面への移動例

	記事見出し（…の下は小見出し）	内　　容	移動先紙面	移　動　理　由
①	いじめに負けてはダメ 隠せぬ障害持つ苦しみ乗り越え	「口唇裂・口蓋裂友の会」がパネル討論会を開き，「いじめ」をめぐる体験や対処法について話し合った。	社会または教育	現在の子供のいじめ問題，学校の対応など社会的広がりをもつトピックであるから。
②	うちの先生（常設欄） 「事実から学ぶ」モットーに	坂部創造性教室・坂部正登氏の紹介。こどもを対象とした教室を開く。	社会または教育	体験学習による，独創的教育実践の報告なので。
③	学園だより（常設欄） 変わった浪人気質変わらぬ教育ママ	①予備校生700人へのアンケート調査結果。 ②西ドイツ在住のこどもの作文から。	社会または教育	現代のこどもの意識，生活などを伝えるものであるから。
④	明るい悩み相談室（常設欄） 「事実無根の投書をする父」	「父が家族の名を語り事実無根の投書をする」という悩みに対し，「父の名を語り事実無根の投書を」と回答。	文化	フィクション，言葉の遊び的な要素が強い。一般の投書面や人生相談の面にはなじまない。
⑤	クスクススクール（常設欄） 「女子がお茶くみ反対というもので……」	一コママンガ。学校の運動会の来賓席に男子のバニーガール。教師・来賓が驚き，怒るという内容。	社会または政治	お茶くみ反対の女子に対する皮肉か，男のバニーガールに怒る大人への皮肉か。社会面や政治面向きの題材。
⑥	高齢者支援へ　企業並み組織 会員2300万人　全米退職者協会長に聞く	全米退職者協会会長に，協会の活動内容とアメリカの高齢者事情を聞く。	社会，人生または経済	高齢者問題は広く社会問題なので。「人生」面を新設するか，高齢者へのサービス事業，年金・保険にも言及している点では経済面でもよい。
⑦	10月（常設欄） ハナダイコン，日本酒，カキ，読書の秋，木工まつり	毎月始めに掲載。新しい月の風物・行事などの紹介。	社会，総合または文化	「入学式」「初雪」など季節の話題が社会面や総合面に掲載されることもあるので。
⑧	おそうざいのヒント（常設欄） 大根とキノコのサラダ	調理方法。	社会または総合	「天気予報」のような形で社会面や総合面に掲載することで日々「食べること」を意識化できる。
⑨	エアメール（常設欄） 妊娠を告げない権利　スイス	「就職の際妊娠していても雇い主に告げなくてもよい」という判決が出されたスイスの新聞からの抜粋。	国際，社会または総合	海外の話題なので。女性の働く権利という点からは社会面総合面で労働問題として扱うこともできる。
⑩	ひととき（常設欄） 「存分に松茸食べたっけ」	投書。娘の買ってきた松茸に母を思い出す，という内容。	投書	一般投書面があるので。毎日新聞の一般投書面には，投書者を女性に限らない「なんでもリポート」という身辺雑記の投書欄がある。
⑪	雲の宴（常設欄）	連載小説（辻邦生）。	文化，またはどの面でも	特に家庭面でなければならない理由はない。

という記事は、「いじめ」をめぐる体験や対処法を話し合う集会での内容を報道したものであり、むしろ社会面でこそ報じられるべき性格のものであると思われる。もしこれが、速報的なニュース価値まではないものの、数日遅れでも掲載され、論議されるべきトピックだとすれば、現在は週一～二回程度の「教育」面を常設化して、教育面に載せることも考えられる。今や教育問題は、社会的な大テーマであり、論争も実際の問題も多い。後の章でみるように、読者の投書のテーマをみても、教育問題への関心はきわめて高い。新聞が、二四ページから二八ページ、そして三二ページへと、たとえ載せきれない広告を収容するための〝受け皿〟的要素が強いとはいえ、増ページ体制にある趨勢の中で、「教育面」が常設ページとなることは十分に考えうることであろう。

また、⑥「高齢者支援へ　企業並み組織」という記事は、全米退職者協会会長へのインタビュー記事であるが、これは社会問題として社会面に、あるいは年金・保険にかかわる記事であることから、経済面に載るべき性格のものであろう。この記事に限らず、老人問題は家庭面で扱われることが多いが、老人問題イコール家庭の問題（それはイコール女性の問題）ととらえる仕方をやめ、老人問題も広く社会問題や政治・経済問題として展開するべきである。また生き甲斐や心の問題などを扱う「人生」面を常設し、そこに掲載することも考えられよう。

このようにして、一一の記事の内容を一つひとつ吟味した上でその移動先をそれぞれ検討してみた結果、表6のように、全ての記事に何らかの〝行き場〟があることが明らかとなった（ただしこの日にはみられなかったが、衣・食・住の実用記事は、外に出て行きようがないものもある可能性は否定できない）。「おそうざいのヒント」とても、天気予報と同じく小さく第一面や社会面に持って行くことすら可能だろう。〝今日の夕食予報〟ができるなど、便利な欄として注目率が高まるかもしれない。

本研究会は、八五年以降、このような議論を行ってきたが、同じような家庭面の解消論を、一九八九年二月一九日、

朝日の「私の紙面批評」で小松満貴子氏が「家庭面を解体してみては」と題して提示している。小松氏は、朝日、毎日、読売各紙の家庭面の紙面構成はどれも近似して衣・食・住、育児、教育、健康、消費者運動、生活エッセイ、小説、老後問題、読書案内、催し物案内などから成り立っていることを述べたのち、これらを「政治、経済や文化面に散在させたら紙面全体がぐっと親しみやすくなりそうな気がする」と指摘している。そして、家庭面を女性用と思って眼を通さない男性、逆に家庭面しか読まない主婦が実際にいることは、性別役割分担についての意識を助長することになる、と分析している。

もちろん、新聞側も一方で、紙面上の性役割の流動化を模索してはいる。既に一九八四年一二月号の『新聞研究』では、「生活・家庭面の広がり」という記者たちによる座談会において、実際に生活家庭部所属の記者の記事（たとえば「緑黄野菜とガンとの関係」）が一面に掲載されるなど、ニュース面との乗り入れが進みつつあることが指摘されている。そして、社会面、経済面、都内版が生活面的になってきていることも、参加者によって一様に指摘されていた。(15) 家庭面は実質的に〝外〟に出つつあるともいえる。

3　家庭面再構築の試み

しかしながら、衣・食・住にかかわる報道や実用・技術記事の他面への解消は、一〇〇％可能、ということにはならないかもしれない。また実際問題として、こういった記事を、全て総合面に載せるわけにもいくまい。くらしにかかわる実用報道は、人びとが生きる上でも欠かせず、毎日提供されれば非常に便利である。食・住・衣に関する新しいタイプの実用誌『オレンジページ』や、『レタスクラブ』などが部数を伸ばし、かつ単身赴任の男性にもけっこう

読まれているという事実は、誌面のビジュアル性や定価の安さ、流通販路の新しさもさることながら、実用的な記事づくりを心がけたことにも由来しているだろう。それと同時に、旧来の『主婦の友』『婦人倶楽部』などが、誌名もおのずと対象読者を限定していたのとは対照的に、これらの雑誌タイトルからジェンダーを消し去ったため、男性も手に取りやすくなった点も影響しているように思われる。新聞の家庭面にも男性読者を引き込む方策がきっとある筈である。一九八九年一二月一七日の朝日「私の紙面批評――働く女性の動き明確に伝えて」で、冨安兆子氏は、「女性に関しての記事は家庭欄でという認識ではないと思うが、女性の問題を政治経済社会など各面でもっと考えてよい時期ではないか」と家庭面記事を〝外へ〟出すことを勧める一方で、「家庭欄にも〝女性向け〟ときめこんでいる男性の目をさます工夫が求められよう」と、男性をその〝内へ〟取り込む方策の必要性をも示唆している。

そこで、家庭面を改善するもう一つの方策として、「家庭面解消論」とは逆の方向で、家庭面を単なる生活技術のみならず、人間にとって生活や家庭とは何なのかということを考える材料を提供するような面にする方法について、次に考えてみることにしよう。

これまで日本社会では、生産第一主義、経済主義一辺倒で、くらしや家族の問題は私的な領域として軽視され、かつ女性に押しつけられる傾向が強かったといえる。くらしや家族や地域の問題をないがしろにして生産力・経済力の向上のみを目指したために、世界的規模の環境破壊や、経済摩擦、あるいは地価高騰や汚職の構造、そしてそれゆえの政治不信・無力感の進行等々が招来されている。また身近なところでは妻ひとりが家事・教育を担い、あるいは仕事との二重負担を強いられることによる疎外感や過労、不満、差別感が増大している。一方、子どもにも質の高い労働者予備軍としての資質が求められ、早い時期から生産性・経済性向上の論理に組み込まれる中で、教育・学校問題は焦眉の解決課題となっている。食物や空気や水には様ざまな有害物質が混ざり、医療や福祉への不満はますます高

まる一方なのに、老後の低福祉高額医療費へのおそれから、現在の生活のあり方をかえりみるよりは、ひたすらお金を貯めることに専念するという悪循環も生じている。今ほど「豊かな社会」を問い直し、生産第一主義の社会を反省して〝くらし〟の視座から、馬車馬のように疾走する社会、管理社会をとらえ直す必要性がある時期はあるまい。

先の節で、家庭面の記事は全て何らかの形で経済や政治や社会にかかわり、それらの面に移行可能だとしたのとちょうど逆の意味で、経済的、政治的、社会的なことがらは、全て家庭や生活にかかわる問題なのである。したがって、この問題には「女の問題」も「男の問題」もあり得ない。すぐれて両性の、人間的な課題といえる。これからの家庭面は、そのような等身大の生活者の視座から、グローバルにものごとをみてゆく両性のための面としての地位を高めていくことが必要だろう。だが、通勤電車の中を眺めれば一目瞭然な如く、スポーツ新聞と経済新聞ばかり読んでいる〝闘争・経済人間〟である男性を、どうすれば家庭面に引き込めるであろうか。

男性読者獲得の方策　まず第一に、家庭面が女性に向けた面とは限らず、男性も女性も読む面であることを強調するために、タイトルや文中に「女」を多用することは避けたい。「母と子」のような特定の性役割を前提とした表現も同様である。これには「親と子」などのような言い換えも可能であろう。

また、過渡的な方法だが、先の「母と子」に対置して「父と子」などのように「男」を表面に出した記事を、同じような頻度で掲載するのも一案ではないだろうか。家庭面といえば女性のための記事ばかりが載っていると思っている男性たちを、とりあえずこの面に呼び込む一つの方法として、それなりに有効性を持つと考えられる。現在では無くなってしまったが前節でも言及した朝日の「男の腕まくり」、読売の「男のおしゃれ楽」など、男性読者向けの記事が「女の○○」にくらべてあまりに少ないので、もっと増やすわけである。男性も日々のくらしや健康、ファッションや子どもの教育などについて、多くの関心を抱き、一家言持っている筈だ。この人びとのニーズに応え、また問題

意識を掘り起こさない手はない。ただし、「女の〇〇」が性役割の固定化につながりかねないように、「男の△△」もあくまで過渡的なものであり、最終的には性を特定する記事は、たとえば妊婦の身体健康に関する記事などは必要だろうから全廃とはいわないまでも、必要なものにとどめるべきであろう。

家庭面投書欄の両性への開放　第二に、男性も呼び込む家庭面づくりで考慮されるべきは、先にもふれたように投書欄の問題であろう。朝日「ひととき」と毎日「女の気持ち」は、投書者を今のところ女性に限っている（ただし読売「身上相談」「赤でんわ」は、女性に限る、という規定はない。「赤でんわ」についてはデスクに問い合わせたところによると、「よい投書であれば男性のものでも載せている」とのことであった）。歴史的にみたとき、家庭面の投書欄が無名の女性に紙面を開放して表現の場を与え、草の実会などのネットワーキングの拠点になった功績は大きい。しかし、両性のかかわる生活を考えるための家庭面づくりという観点からみるならば、もうそろそろ家庭面の投書欄を男性にも開放してよい、いやむしろ、くらしについて一言持っている男性に、積極的に紙面を提供してもいい頃ではないだろうか。

一九八五年一月二八日の朝日の「ひととき」欄には、一月一九日付「『女の城』は譲れません」という、「ひととき」への男性参加を否定した投書に対する反論という形で、「やはりこの欄に男性を」という題の女性の投書が掲載されている。この投書は、「一個の男の人間として、赤裸々な動きをさらけ出してほしい」という願いとともに、「ひととき」の女性の投書に対する男性からの意見・反論を載せることの意義や、亭主関白のワンマン社員族にこそ「ひととき」にかかわらせることの意義を説いている。このように、当の女性からも家庭面投書欄における〝男性投書歓迎論〟がわき起こっている。一方で新聞週間中であった一九八五年一〇月一六日の、朝日の一般投書欄の「声」には、「男も書いてみたい心潤す『ひととき』」という題で、「家庭面の『ひととき』欄、男にとってもなかなか楽しいものである。……ところでこの欄を女性に占領されていてよいのであろうか。男にとっても、こういう場がほしい」という男

性からの投書が掲載されている。男性の側も、くらしにかかわって表現したいことは持っており、かつ女性とコミュニケートする紙面を求めているのである。

一方、新聞を作る側からも、女性専用投書欄の見直しについては検討が始まっているようだ。『新聞研究』一九八四年一二月号の記者座談会[16]でも、朝日の「ひととき」を女性に限るのをやめてはという内部論議があったことを紹介している。実際に、このころすでに「ひととき」欄には、そこに載った女性の投書に対する男性からの反応も多く寄せられているため、〃反響特集〃が組まれるさいには男性の声も載録されている。これなどは家庭面の投書欄における両性の相互乗り入れのきざしと受け取れなくもない。こうした家庭面投書欄の動きの一方では、朝日の「テーマ談話室」にみられるように、それまで大所高所からの〃主張〃がメインであった他面の一般投書欄において、日常のくらしや生き方にかかわる身近な投書が増加するなど、一般投書欄の家庭面投書欄化が進行しているようにも見受けられる。このように、投書においても性の流動化は進みつつあり、家庭面を男性にも開放することによって、両性の間により一層幅の広い、実り多い議論が巻き起こることが予想される。

家庭面再編成試論　第三に、多様な情報が掲載されている新聞の他の面の記事の中で、家庭やくらしに結びつきうるものを、むしろ家庭面の〃中に〃入れてゆくことで、男性読者を引っ張り込む方図が考えられよう。先に家庭面解消の具体的な試みをおこなったのと同様に、今度は一九八六年一〇月一日（水曜日）の毎日新聞の、家庭面を除く全記事の中から、家庭や生活、くらしにかかわりうる記事をピックアップして、他記事面から家庭面への移動例を考えてみたのが表7である。

この日は、国土庁によって全国の地価調査が発表された翌日で、一面をはじめ、東京版や社会面で、この〃狂乱価格〃ぶりが大きく採り上げられている。この土地高騰は、政治的・経済的課題であり、政治面、経済面、社会面、地

域面に載るのも当然ではあるが、人びとの生活、家づくりに直接的な影響を及ぼすという点ですぐれてくらしに密着した問題でもある。しかしながら、同日の家庭面では、他面と原稿入稿締切が異なる（早い）とはいえ、家計や家族や生活をおびやかすこの「土地高騰」にはふれられていない（関連記事が出るのは三日）。また、九月末に、中曽根首相が人種差別意識をあらわにした「知識水準」発言を行ったのを受けて、これにかかわる記事（寄稿文）が二つ、三面と四面にみられるが、これなどは、日本が市井のレベルで真に国際化し、自らの内なるナショナリズムを反省するための恰好の素材とも考えられる。身近な地域に生活するようになったアジア人とのコミュニケーションを男女ともにはかるためにも、家庭面で採り上げる価値のあるものといえよう。

そのほか、この曜日の毎日は、「マネー&ライフ」という、家庭面の延長的な、実用記事も多く含む特集面をフィーチャーしている。こういった、本来家庭面的な内容が〝外〟に出る紙面づくりも最近は散見されるようになってきており、ことさらこれを家庭面に〝戻す〟必要はない（たとえば『婦人労働白書』の発表にともなう「働く女性、10年で35％増」という記事は、この日の総合面に掲載されている）が、「マネー」と抱き合わせにして家庭面に〝入れる〟ことで、男性読者をひきつける方途にはなるかもしれない。また第二経済面には「課税最低限5千万以上に　相続減税案示す」との記事が掲載されているが、〝経済記事〟として「経済面」に載せられているこの記事は、家計に直結した問題であるという点からみても十分「くらし」にかかわる記事である。こうした記事を家庭面の〝中〟に入れ込む方法も、家庭面を充実させるためのひとつの方策であろう。経済面的な題材や、スポーツ面的な話題を家庭面に増やして男性を呼び込み、一方、そうすることで女性をスポーツや経済に強くする、といったような工夫は、今のところほとんどなされていない。これなども、〝家庭面充実策〟の今後の課題といえるだろう。

さらにまた、今まで述べてきたような表現上、構成上の改変だけでなく、記事内容そのものも考え直される必要が

表7　毎日新聞1986年10月1日（水）の他紙面記事の家庭面への移動例

	掲載面	記事見出し（……の下は小見出し）	内容	家庭面を充実させるための移動理由と取り上げ方の例
①	総合	基準地価　大都市で急騰 東京23区，商業地は40%	国土庁による全国基準地価格の発表記事。東京の地価が大幅アップしたほか，あおりで住宅地もアップ。	他紙面や地方版で言及されているが，くらしに直接かかわり，家庭や生活を逼迫する住宅問題の重要原因である。ますます職場から遠くなる“自分の家”について，男性も深刻に考えることをうながす記事にすることが可能。たとえば，都内の一戸建ての家を買っていくら，月づきいくらのローンで何十年間，といった記事や，延びる通勤時間と“痛勤ラッシュ”，減る家族との交流，子どもと会えない日々の増加，たまる疲労，ローンの家計をささえる妻のパート労働など，様ざまな切り口が考えられる。
	総合	ニュースきょうあす――際立った二極分化現象 急がれる狂乱地価抑制	東京の商業地・住宅地の地価アップの一方の，地方の地価の鈍化についての解説。	
	地域（多摩・東京）	東京の基準地価格 1年で最高の22.6%上昇	東京の基準地価格調整に関するデータ一覧と高騰の原因についての記事。	
	社会	ルポ地価驚騰　1 たった半年　ビックリ2倍	高級住宅地価の高騰，そのカラクリについてのレポート。	
②	総合	日本の政治家に直言するN・セイヤー教授 首相発言に人種的ごう慢さ	中曽根首相の人種差別発言を批判する米ジョンズホプキンス大教授の寄稿文。多様国家の相互尊重を説く。	「政治家」に向けた文だが，身近な生活に，外国人がかかわってくることが増える現在，一般市民がくらしの中でみずからの差別意識を問うきっかけにもなる。
③	総合	記者の目――大統領が初来日中のフィンランド 学ぶ点多い積極平和外交	フィンランドのコイビスト大統領来日に際しての，フィンランドから帰国したばかりの論説委員の解説記事。平和憲法と非核三原則を掲げる日本として，平和国家フィンランドと日本との共同歩調を説く。	軽軍備で経済成長をとげた日本と共通性のあるフィンランドの独立国ぶりや平和外交に，日本が学ぶべき記事として，また日米安保を生活レベルで考える記事として，諸外国の文化や生活や社会を伝える内容は家庭面にも大いに欲しい。
④	内政	「特殊法人化含め論議」 臨教審第四部会が方針	国立大学を特殊法人化することも含めた議論を行う方針を決めた臨教審の記事。	“経営”を前面に出した教育・学校改革案に，賛成してよいものかどうか，家庭面を舞台に広範な議論を巻き起こすきっかけをつくる。

⑤	経　　済	「頼れる日本」強調　宮沢蔵相が演説 内需拡大に努力	ＩＭＦ・世界銀行総会で「頼れる国日本」「インフレなき持続的成長のための内需拡大」を目ざすと蔵相発言の要旨。	「大国」や「成長」といったスローガンが，生活・家庭の視座からみて適切か，また経済的側面からみて実現可能かなどを考えさせる記事にすることが可能。
⑥	経　　済	郵貯も源泉徴収に 大蔵方針　郵政の反発必至	マル優廃止にともなう課税方式として，郵便貯金に源泉徴収を義務づけるという大蔵省方針の記事。	マル優廃止問題は家計に直結するテーマ。これが実現した暁には，くらしがどう変わるか，その変化にどう対応するか，解説する記事として展開できる。
⑦	マネー&ライフ	お疲れさまの人生航路　人間ドックでひと休み	人間ドックのすすめ。ドック内容や料金一覧表などの記事。	主に男性向けに書かれたこの記事を家庭面に移動することで，家庭面に男性読者も魅きつけることができると思われる。
⑧	マネー&ライフ	ヒット商品の秘密	発泡性の入浴剤に関する記事。	風呂用品は生活のための商品であり，またその安全性等にも着目する必要がある。
⑨	マネー&ライフ	強くてさびないミニ温室	ミニ温室が主婦の間で人気との商品記事。	家庭用品であり，生活にうるおいを与えるので。
⑩	マネー&ライフ	トークトーク——ハウジング 収納の工夫	住宅評論家による収納についてのノウハウ。	家庭のくらしにかかわる実用記事であり，家庭面を充実させる内容なので。
⑪	経　　済	課税最低限５千万以上に 相続減税案示す	政府税制調査会が相続減税案を発表した記事。贈与税，配偶者に対する相続税減税措置案も。	両性にかかわる，家計を直撃する問題であるから。
⑫	地　　域（多摩・東京）	向こう三軒　ニュースと意見	電話による投書。ヘチマ利用者，お米の炊き方などの実用的な話のほか，「うちのかぞく」というこどもの似顔絵など。	家事に関する実用記事が多く，家庭面に入れれば広がりを増す。
⑬	社　　会	両親の訴えを棄却 零歳児保育“拒否”で市に慰謝料請求	公立保育所での０歳児保育が認められなかったことに対する訴訟に対し，東京地裁が棄却する判決を下した記事。	速報は社会面でよい。フィーチャー面としての家庭面で，子どものいる共働き家庭の保育問題の観点から，さらにつっ込んだ記事を展開することができる。

ある。今後の家庭面は、自明視されてきた「家族」や「生活」や「環境」をもう一度根本的にとらえ直し、〃くらし〃の視座からライフスタイルの変革を促すような記事内容を増やすべきだろう。変化する家族の多様性や新しい男女関係のありかたを見据えるための参考材料となる多面的な報道を心がけるとともに、こうした変化の評価できる面は伸ばし、それと同時に変化に伴う問題点も積極的に採り上げるような解説・論評の機能の発現が望まれる。環境問題、消費者教育、高齢化社会の問題も、人びとの生き方と政治に密接にかかわる〃くらし〃の重要テーマになると予想される。速報的ニュースは総合面や社会面に譲り、取材時間や出稿タイムの制約、記者クラブ発表等に縛られないフィーチャー面としての家庭面の特性を生かしてじっくり取材され練られた記事、企画もの、連載ものを充実していくことが家庭面に望まれる。

実際に、新聞社内部では、他の一般ニュースの一本あたりの記事行数が減る（活字の大型化と、記事本数を増やすため）趨勢の中で、テーマや問題意識を持って書きたいことを書ける面としての家庭面がクローズアップされ、担当を希望する記者も増えているという。[17] 現代の社会は生産一辺倒でやってきた近代社会が行き詰まり、フェミニズムの問題や家族・カップルの問題、廃棄物やエコロジーの問題などをとらえねばもはややってゆけない社会へと明らかに移行しつつある。新聞における家庭面の存在と幅広い興味を持った（あるいは幅広い部署を経てやってきた）記者の存在は、二一世紀に向けての大きな資産となるだろう。

以上、当面の家庭面改善方法をいくつか挙げてきた。前節で述べた「家庭面解消論」と、本節で述べた今までの家庭面に替わる「もう一つの家庭面」を探る方法との二案のうち、どちらが適当かを判断するのはむずかしいが、最終的に家庭面および新聞紙面から廃棄されるべきは、固定的な性別役割分業や性差別であり、それを助長するような新聞の姿勢である。今回の家庭面の内容分析から、未だそれらの残滓がぬぐえていない現状が浮きぼりにされたといえ

よう。

おわりに――「家庭」面から「生活」面へ

本稿ではまず、家庭面が日本の近代化・大衆社会化とともに「婦人向け」の欄としてつくりだされ、そののち、家庭に関する情報を提供する紙面として変化してきたことを概観した。そして、現在では家庭面が、社会、生活、文化、投稿などの分野から構成されていること、一九八五年と一九八六年との間ではいくばくか男性向けと思われる記事が増えたものの、それほど大きな変化が見られず、未だに〝家庭に関することは女性の領域〟ととらえられる傾向が強いさまをみてきた。そこで男性にも家庭に関することがらについて考えてもらうべく、家庭面を他面に分散させてゆく解消論と、家庭面に男性読者を引き込む方策の二通りのやり方で家庭面を男女共生の時代にふさわしいものに変革することを試みた。もちろん、九〇年近い歴史を有する家庭面の定型性は、一朝一夕には変わるものではないだろう。今後のなりゆきが注目されるとともに、定期的な内容分析が必要であろう。

最後に、「家庭面」から、「生活面」への名称の変更を提起して、本稿を終わりたい。既に述べたように、現在家族や家庭のあり方が変化・多様化しているが、そうした家族生活の変化や多様化は、労働や余暇、家事、育児や教育、消費・経済、環境や地域、さらには政治や法律など、より広範な人間の生き方にかかわる問題にまでひろがる射程をもっている。こうした、多様化した家族や人びとの生き方を等身大の視座からグローバルに見通す、すぐれて文化論的・指針的紙面には、「生活面」という名称こそふさわしいと思われる。いまや「家庭」と一口にいっても様ざまで、単身赴任によるひとり暮らしなども増え、家庭という言葉で衣・食・住、くらし全般を言い表すことはもはや不可能である。新しい家庭は誰もが生きていくうえで必要な営みに関すること、広範な社会・文化をも射程に含めながらよ

りよい生き方を考えること、女性および男性の私的な部分の充実を目指すことなどを目的とする面となっていったらよいと思う。単に名称を変えればよいというものではないが、しかし、名称が変わることで、家庭面の内実が変わっていくことを期待したいと思うのである。

また、当然、面建ての名称の変更にともない、新聞の部署の名前も、「生活部」と改まる必要がある。その際、〝女性記者は生活部に〟という新聞社内の性差別的な人事配置を一掃し、女性記者こそ政治部や経済部や社会部に〝出し〟、また一方で政治部や経済部や科学部などから、男性記者を〝入れ〟、多様な専門分野の記者たちの連携による〝部際〟的な紙面づくりが目論みられるべきだろう。ちなみに朝日で「家庭」面を受け持っているのは「学芸部」、読売の「家庭とくらし」面は「婦人部」の担当であるが、毎日で「家庭」面を担当している部署は、「生活家庭部」と名乗っている。三紙以外にも北海道新聞のように「生活部」という名称をもつ家庭面担当箇所も既に存在するが、紙面そのものを真に〝生活面〟化してゆくことは、今後の課題といえよう。

生活をめぐる両性の関係はすでに大きく変わりつつある。このような現状を正確につかんで報道し、両性に生きる指針を与えるような紙面づくりが、今「生活面」に求められているのである。(18)

（1）毎日新聞社『毎日新聞百年史』毎日新聞社、一九七二年、七四頁。
（2）岡満男『この百年の女たち――ジャーナリズム女性史――』新潮社、一九八三年、四九頁。
（3）岡満男、前掲、五三頁。
（4）読売新聞社『読売新聞百年史』読売新聞社、一九七六年、二五四頁。
（5）山川菊栄『女二代の記』平凡社、一九六三年、一一〇頁。
（6）影山三郎『読者の言論　歴史と展望』現代ジャーナリズム出版会、一九七六年、一二二頁。
（7）読売新聞社『読売新聞百年史　年表』読売新聞社、一九七六年。

（8）影山三郎、前掲、二二五―二二六頁。
（9）早川克巳、中村輝子ほか「〈座談会〉生活・家庭面の広がり」『新聞研究』一二月号、一九八四年、一四頁。
（10）袖井孝子「私の紙面批評」『朝日新聞』一九八三年四月二〇日。
（11）田中和子「新聞にみる構造化された性差別表現」『マスコミと差別語問題』（磯村英一・福岡安則編）明石書店、一九八四年、一八三頁。
（12）早川克巳、中村輝子ほか、前掲、一四頁。また、早川克巳「なぜ『男も読む婦人面』か」『新聞研究』一一月号、一九八二年、四七頁および加藤春恵子「変容する女性とメディア」『新聞研究』二月号、一九九〇年、二七―二八頁も参照のこと。
（13）秋山登代子、謝名元慶福「日本人の意識の一五年（1）――『日本人の意識』調査から」『放送研究と調査』二月号、一九八九年、二頁―一七頁。
（14）日本新聞協会研究所「第八回全国新聞信頼度調査」『新聞研究』九月号、一九八九年、五〇―六八頁。
（15）早川克巳、中村輝子ほか、前掲、二〇頁。
（16）前掲、一四頁。
（17）前掲、二〇―二一頁。
（18）本稿脱稿直後に朝日新聞は、家庭面の刷新についての社告を掲載した（一九九〇年六月二六日）。七月一日からはじまった新家庭面では火曜日――暮らしにかかわるニュースの大型インタビュー記事、水曜日――教育を考える、木曜日――高齢化社会を考える、金曜日――暮らしに関する国際ニュース、土曜日――週末をたのしむ、といったように、曜日ごとに異った分野のテーマを、生活・くらしとの関連で取りあげるというスタイルがとられている。また土曜日には「八〇年代に女性が提起した様々な問題に男性はどうこたえるのか」という趣旨から「男に聞く」というコーナーが設けられ、男性を家庭面に引き込む試みも行なわれようとしている。紙面刷新後の一週間の紙面をみたかぎりにおいては、性別面建ての色あいは従来に比べて薄れ、本稿で論じた「生活面」への移行の方向性がうかがえる。今後の推移を見守りたい。

（共同執筆者　田中和子〈国学院大学法学部助教授〉・諸橋泰樹〈成城大学大学院・日本新聞協会研究所委嘱研究員〉・吉岡マリ〈（財）市川房枝記念会職員〉）